

小説『源内・コード』

作 築港万次郎

(注：香川の人は読まないでください)

1. 標的は「T」

芸能人がお正月にバカンスで行く海外観光地のナンバーワンは、昭和16年に太平洋戦争が始まったハワイである。

昭和20年(西暦1945年)太平洋戦争の敗戦で平和になった日本人が、気軽に海外旅行に行けるようになったのは昭和40年代である。南太平洋マリアナ諸島に浮かぶ激戦地のグアム島とサイパン島は、近くて行ける南国のパラダイスとしてハワイよりも先に日本人観光客を集めた。

2島にはさまれた位置にある知る人ぞ知る、サンゴ礁の軍用飛行場がテニアン島である。

昭和20(西暦1945)年8月7日のことである。テニアン島に日本陸軍が造った滑走路を使って離陸した、3機の巨大なアメリカ空軍飛行機が日本の瀬戸内海を目指して飛び立ってから、まもなく7時間が過ぎようとしていた。

機内のトイレ室に閉じこもり便座に腰掛けた膝の上に、広島市内の航空写真を広げてT字形の相生橋交差点中央の中心に狙いを定めて、ダーツの矢を落とすまねをしているのはアメリカ空軍ナンバーワンの実力が認められた爆撃士である。

2機の観測機にはさまれて飛ぶ爆撃機には、たった一発の爆弾しか積まれていなかった。搭載された新型爆弾の名前は「リトル・ボーイ」という。

母親の名前「エノラ・ゲイ」を銀色に光るアルミボディーの機体に白ペンキで書いた、天空の要塞B29を操縦する機長からの機内放送が搭乗員のヘッドホーンから聞こえてきた。

「同乗した11人の同志全員に命令する。先発機からの無線連絡がいま届いた。広島の天気は良好とのことだ。小倉へは行かない。目標は広島に決定した。本機はあと1時間ほどで、ポイント「T」に到着する予定で飛行している。各員は全力で今回の任務にはげめ」

爆撃士は人類戦争史上最大の破壊工作に臨むため、覚悟を決めるとトイレ室から出てきた。彼の首にはテニアン島の爆撃士仲間から餞別でもらいうけた、イタリア・アッシジ観光土産の「フランシスコT型十字架」が飾られてあり、それを冷や汗のにじむ手でしっかりと握り締めていた。

ボーイングB29爆撃機の最高位ポジションは機長が座る操縦席ではなく、機長と副機長席にはさまれた機首の最先端にある爆撃士の座席である。機首の最先端はガラスのドームに包まれて、爆弾の投下ポイントを確認できるようになっている。

爆撃士がトイレから戻り指定席に着くと、足元のガラスの下には世界で一美しい景観と賞賛される瀬戸内海の海面と、海に浮かぶ大小多数の小島が朝焼けの光に照らされて輝いていた。

爆撃士は四国本島の北海岸線を舐めるように目で追いながら、テニアン空軍基地の別部隊がひと月ほど前の7月4日深夜、ピンポイント爆撃をしたという小さな都市を探していた。

爆撃士は上部右後方座席で操縦するティベッツ大佐機長を振り返り、仰ぎ見ながら報告した。「広島「T」ポイントを見つけるための、目安とした建築物を備えた街が下に見えてきました」

眼下の四国香川県の海岸にはこれから飛んで行く広島市にそっくりなつくりの街が、灰燼(かいじん)と化していた。

広島城に似た石垣城壁の低い平城があり、数少ないコンクリート建物の中に、屋上に突き出た階層がある「広島県産業奨励館」に似た規模の建物に接近して、標的とするT字形をした相生橋を備えている街が、オールド高松市であった。

「高松市は飛行士仲間で話題になっている街だ。ハワイのダイヤモンドヘッドにとっても似ている屋島があり、山の麓には遠浅の春日浜がワイキキビーチのように広がり、高松港には多くの大型船が停泊しているところは、さながら日本のパールハーバーと云うことだ」

機長は興奮気味に言った。「リメンバー・パールハーバー。そうだ、爆撃士に広島爆撃の練習をさせてやろう。今から高松の「T」の真上を飛行するから、Tの交差点の中心に、史上最強の爆弾をみごとに投下できるかどうかを、シュミレーションしてみたまえ」

「機長、それはありがたいことです。もしも爆弾投下に失敗し、日本軍の捕虜になったときには、私は自決する覚悟でいます。絶対に失敗が許されない新型爆弾の投下ですから」

爆撃士は胸ポケットに忍ばせた青酸カリの粒を確認しながら、レーダーと照準鏡に神経を集中した。高度9千呎から Takamatu 中心商店街地の中に見える「T」の印を探した。

高松市が空襲にあったのは、広島市に原子爆弾が落とされるおよそひと月前。新型レーダー装備で夜間攻撃を可能にした B29 爆撃機 116 機の大群が、テニアン島の飛行場の3千呎級滑走路一本を使い、始発機から最終機までが離陸するのに要した時間はおよそ2時間かかっている。離陸にかけた同じ時間をかけて、整然と一列飛行をしながら高松市の標的「T」の上空3千呎から、焼夷弾を2時間をかけてピンポイントで落とした。「高松市中心街全滅作戦」は大成功させていた。高松空襲の様子は夜間戦闘機月光が観測している。

ただ1機の B29 だけはレーダーの不調で高松の標的「T」から迷子になり、残った爆弾を岡山県側の玉野に処分投下してテニアンにもどっている。

終戦末期にはアメリカ空軍の爆撃は軍民かかわらず、一億総特攻隊になった日本人を壊滅するために全国都市を所かまわずじゅうたん爆撃していた。にもかかわらず高松の丸亀町商店街三町ドームがピンポイント爆撃にされたのは、広島のポイント「T」相生橋に原爆を確実に落とせる爆撃士をテニアン飛行隊から選考するためであった。

Tに交差した丸亀町三町ドームのど真ん中に焼夷弾をみごと打ち込んだ、最優秀爆撃士を乗せた B29 がひと月後にふたたび高松の朝の空にもどってきた。

爆撃士の指が爆弾投下ボタンを押すまねをして動いた。「機長、投下シュミレーションは成功です。この調子で本番も、必ず成功させてみせます」

「それはよかった。広島の本番では相生橋の中心によろしく」機長が返答した。任務成功の予感に安堵した機長は、広島市に向かうため機首を高松市から丸亀市の方向に旋回させた。

爆撃機 B 2 9 エノラゲイが高松市中心街の上空から消えた一時間程して、広島市の標的「T」の中心をねらって、寸分の狂いもなく地獄の爆弾は落とされた。

広島に向かう B 2 9 を見送った高松中心街では焼け跡の片づけが進み、焼け落ちた鉄骨ガラス葺きアーケードの瓦礫を取り除いた跡には、T字形で交差する三町商店街のT字形になった通りが、早くもよみがえっていた。

アメリカによる日本への空襲作戦は、焼夷弾で木造住宅を無差別に焼き払う方法で、連日のように各地で被災していたので、いつかは高松市も必ず標的にされると誰もが思っていたが、当局は住民に疎開することを許さなかったため、昭和20年7月4日の2時間で1200人余が焼け死んだ。標的となった三町街アーケードドームの中心からたった4キロメートルの距離を離れて疎開しておれば、死傷者のほとんどは殺されることもなく無傷でいられたはずである。

人口3万人ほどの中小地方都市で、しかも働き盛りの男はほとんどが海外へ出兵して女は阪神の軍需工場にかりだされた特色のない街で、これほど多くの被災者を出した異常さは防災対策の無知が引き起こしたのである。被災者のほとんどが老人と子供である。

焼夷弾が降ってきてもバケツリレーで水をかければ簡単に消火ができ、竹やりで敵機を突き刺せば街が守れると信じさせた後方支援教育が、市民の疎開を妨げていた。

空襲直後の木造建物が崩れ落ちた瓦礫の中で、10棟あったコンクリートビルの数棟が焼け残り屋島を屏風にして高松中心街に浮かび上がっていた。114銀行と高松女学校とともに、屋上にエレベーター階層を載せた6階建の四越高松呉服店もその1棟である。

呉服店から名前が変わって三越高松店となったデパートの敷地は、今でも空襲爆撃をはねのけた以上のミステリーパワーがあるスポットである。

## 2. 美術館でバレエ

3階建ての中央を吹き抜けにして、屋根をガラスで覆った開放的なエントランスホールを配した高松市美術館は、香川県都市には立派過ぎるほど良くできた建物で市民が自慢する文化施設である。

建物の外観は凹凸の少ないシンプルな箱型である。グレー色の花崗岩が外壁を覆い、コ

ントラストに黒色の横縞が入れられた重厚感は、パリの新凱旋門に隣接するオフィス地区にでも建っていれば、すごく似合いそうな、近代建築様式のキリスト教会のようである。

ヨーロッパの古都では、壁面に彫刻飾りや窓枠を絵で描き、まるで本物の彫刻飾りや窓があるかのように見せる騙し絵の手法があるが、鉄筋コンクリート造の外壁に薄く剥がした石板を貼り付けて石積みの家に見せかけた建物は、騙(だま)し家仕様と言えればいいのだろうか。

美術館通りの石敷き歩道からは、三段の石段を上がって美術館入り口に着く。

石段の四ヶ所には石柱が橋の親柱のように置かれていて、その上部にステンレスの枠で縁取られたガラスのピラミッドが、烏帽子(えぼし)のように置かれている。四個の三角錐の先は、美術館の入り口方向を指し示している。

ガラスの三角錐で案内された入り口へと進むと、低い天井がまるで洞窟の中に迷い込むような気分させてくれる。

二段構えの自動ドアで仕切られた洞窟を抜けるとエントランスホールの天井から自然光が降り注ぐ。まるで、イエス・キリストが十字架の刑にかかり死したのち、遺体を安置した洞窟をイメージさせる。

キリストの死から三日後、イエスを探しにマグラダのマリアが洞窟に入ると、遺体は消えていて、頭上から光がさし、イエスは復活したとされる神秘の洞窟のような美術館である。

ホールの中心には、この美術館一の作品が入場者を正面から向かえてくれる。流政之が女の股をイメージして黒色御影石から削り出した、高さ3.5mの『黒のナガレバチ』だ。

エントランスホールは外壁と同じ花崗岩の石板で囲まれていて、外壁とエントランスの内壁の間が美術品展示室や目的部屋に仕切られている。

この建物を真上から見ると、車の扁平タイヤを四角くして横に倒したような形だ。タイヤのホイール部分が、ガラス天井のエントランスホールの場所になる。タイヤの部分が展示室や階段廊下になっている。中二階内壁の一部がエントランスホールに向いて開口している。

まばらな来館者しかいない静かな館内に、優雅な演奏曲が流れてきた。中2階の休憩椅子にひとりで座り軽く体をほぐしていた美しい女性・香西しおりが、ラジカセのボリュームをいっぱい高くして音楽を流した。

流れてきた曲は、「ロミオとジュリエット」と「ボレロ」が軽快に組み合わせられている、地元高校の交響楽部が演奏した録音である。曲はしおりが編曲したものである。

しおりは音楽にあわせて、しなやかに胸を反らしながら立ち上がると、下のエントランスホールのナガレバチを意識するように踊り始めた。

しおりの服装はGAPでそろえた地味でカジュアルなものを着けているが、普通の女性と違っていたのは足にトゥシューズを履いていたこととヴェネチアン・マスクをかぶり美しい顔をかくしていたことである。

バレエ『ロミオとジュリエット』の音楽に乗せて、つま先立てでエントランスホールまで階段を下りてくると切れのいい回転を決めた。

踊りはしおりひとりで舞うソロであったが、ナガレバチをロミオにみたてた、パ・ド・ドウが演じられているかのような、優美な振り付けがされている。気のせいか、しおりの肩のひねりにあわせて、ナガレバチも体をひねったような錯覚が観客に伝わった。

高松市美術館館長の木目は、受付カウンターのそでで監視している四人の学芸員たちと、数少ない観客達がバレエを見る様子を観察していた。

高松市美術館は立派な建物と好立地にもかかわらず、毎年右肩下がりに減少する来館者数に悩んでいた。このままでは、市の経費削減のために閉館もありうる、不良施設に陥ろうとしていた。

今回の香西しおりのバレエは、エントランスホールの魅力を引き出し、来館者を増やすための、市民参加型の実験であった。

来館者は突然の踊りにあっけにとられて見ていたが、踊り子しおりのバレエがあまりにも優美なので、しばらくすると感動で観覧していた。

開放された玄関ドアから漏れる音楽に気づいた、美術館通りに行く通行人たちがつぎつぎと入場して来て、いつしか館内は満員になっていた。

踊りのフィニッシュは、スポットライトが人の目のように当たった、ナガレバチの台座にすがりつくポーズをしおりがストップモーションで決めると、満員の観客からは、盛大な拍手が沸き起こった。

香西しおりは18歳までを生まれ故郷の高松市で暮らしたが、子供のころから母の影響で始めたバレエを極めたくて、地元高校を卒業すると同時にドイツ・ドレスデンの有名バレエ団に入団した。

恵まれた素質と頑張りでメキメキと頭角を現し、評論家からはフランス・パリオペラ座のプリンシパルにまもなく登用かとの噂もあがるほどに活躍していた。

成功した自分を夢見ることもあった今年の春、28歳になったしおりに悲劇がおとずれた。高松に残した母が徘徊した。アルツハイマー型痴呆症が悪化したのである。

しおりが幼い頃に離婚した母は、自分が果たせなかったバレエの夢をしおりに託して一所懸命に働いてきた。

地元の中堅企業で実直に働き信頼されながら経理業務を勤めてきたが、ここ最近行動がおかしくなり60歳の定年を目前にして退社させられた。

しおりは母の面倒をみるためには、母をヨーロッパに呼び寄せるべきか、自分が日本にもどるのが良いのかで、毎日涙を流して悩んだ。

### 3. 運命のふたり

バレエを踊り終わったしおりは、人ごみをかきわけて木目館長に近寄った。館長はまんめんの微笑みでしおりを迎えた。

集客の手ごたえを感じた木目館長はしおりに感謝した。「しおりちゃん、ありがとう。君のような本物の芸術を、高松市民は望んでいたことが分かったよ。本物の芸術にこそ人は感銘を受けることを僕は理解したよ。これからも時々出演を頼むよ」

「こちらこそ役所一体で応援してくださり感謝します、木目館長さん。高松に戻ってからは、バレエ教室のお手伝いで子供たちに教えていますが、高松市立美術館を借りて、舞台の本番気分に合わせてもらえて記憶がよみがえりました。もういちど、オペラ座の舞台上で踊りたい気分になりました」

「早くお母さんが良くなって、またヨーロッパに戻れたらいいのにね」木目館長はしおりを気遣った。

木目館長としおり親子の住まいは同じマンション棟の住人で、ひごろから顔見知りであった。

ヴェネチアン仮面をバッグに押し込みトウシューズからスニーカーに履き替えたしおりは、見送る木目館長ら美術館関係者ら公務員に手を振りながら足早に美術館通りに出た。

あと10分後に開講する『多賀満夫的・新説高松城史』を聴くために、香川県立歴史資料館へ急がねばならなかったからだ。

美術館を出ると、通りはすぐに丸亀町商店街のアーケード通りへと続く。パラパラと雨が降ってきた。

高松市街地商店街は2700メートルにおよぶ日本一長いアーケードを持つ商店街が連なり、丸亀町商店街はその中心にある。

丸亀町商店街は南北500メートルのアーケードの下に、約200軒の高級ファッション系を中心とした小売店舗が連なっている。

地方都市の中心商店街は大規模ショッピングセンター乱立の影響で、シャッター通りに変わり果て壊滅寸前である。

丸亀町商店街も客の通行量が激減して、シャッターを下ろす店が現れていたが、中心市街地活性化の名目で、行政による税金の投入を得ることができるようになり、再開発が進行している。

その手法は、60年余前に空爆で全ての建物が破壊されて、そこから再生繁栄した経緯をもう一度繰り返そうとしているのである。

再生に必要な資金を日本国、香川県、高松市3行政の援助に頼るのである。工事用防塵幕の奥で重機が大きな音を立てて建物を解体している。建物は商店ごとに異なっていて、空襲跡に建てた簡易な木造家屋があれば、建てて20年経たない鉄筋コンクリ

ート4階造までさまざまである。

ヨーロッパあちらこちらのオペラ座をゲスト・ソリストでバレエ公演して回りながら、古い建築物を百年千年の単位で大切に使う文化を見てきたしおりには、まだまだ使える建物を自らが壊して歴史の流れとは全く違うデザインの建物に建てなおすという、日本的スクラップ&ビルドの行為が理解できなかった。

しおりが住んでいたドイツ・ドレスデンでは、高松市と同じように昭和20年の、連合軍の無差別空爆撃で都市は全壊し焼き尽くされたが、その後の復興では、瓦礫を拾い集めて、爆撃以前と全く同じ姿に積み上げ直して、破壊前と同じ、美しい街並みを取り戻したのである。

本来の再生とは、先祖の歴史遺産を残し、次の世代にわたす行為をいうのである。

200<sup>北</sup>北に行くくと三町商店街交差点に着く。この交差点から南に500<sup>北</sup>延びるアーケード商店街が高松で一番古い歴史がある、高級ファッション店の多い丸亀町商店街である。交差点から西に向かうアーケードは片原町商店街。東に向かうアーケードは兵庫町である。

3つのアーケードがT字形につき合わさる交差点の頭上には巨大な透明ガラスのドームが、中心市街地再生事業でつい最近完成したばかりである。

イタリア・ミラノのガレリアを参考にした、商店街が建築したドームとしては日本一の規模を誇る。

雨模様で薄暗くなったアーケードに眩しく照明が灯された。しおりは照明の輝きに、思わずアーケード・ドームの中心を見上げた。下から見上げるドームの中心。それはまるでダーツの的のようであった。

ドームの中心に大粒の雨が音をたてて降り注いでいる。およそ60年前の昭和42年7月4日の夜にはこのドームがある中心をターゲットにして、116機のB29から無数の焼夷弾が雨のように降り注がれたのだ。

ドン。ガッシャーン。子連れの歩行者に、老人が運転する電動アシスト自転車がぶつかった。幼子は転倒して泣き叫び、若い母親はうろたえていた。

高松のアーケード商店街は、歩行者で混雑していても自転車の乗り入れはO.Kなのである。

高松中心地は平坦地なので、自転車での移動が便利で、普及率は全国トップクラスである。アーケード商店街も自転車は、日曜日の混雑時間を除いて自由に通行することが許されているため、衝突事故が頻繁に起きている。

四国の玄関を自負する高松市中心地には、中央官庁の支所や大企業の支店が集中している。ここに通勤して来た人たちは、高松の交通マナーの悪さに驚くが、最大の驚きはアーケード商店街の中を自転車の群が暴走している風景に圧倒されるのである。

三町商店街のアーケードから北に出るとすぐに、百貨店・四越高松店がある。北に接し

て丸亀町商店街の組合が所有する普通車が230台収容できる6層階大型自走式立体駐車場がある。駐車場はいつも満車で繁盛している。

丸亀町商店街組合は、大規模ショッピングセンターが香川県に押し寄せてくる前から、行政の補助金を受けて、駐車場経営に乗り出し、巨額の利益を生み出していた。

個性の強い商店街組合員たちが心ひとつになって再開発事業を成せるのは、駐車場収益が積み上がっていたからこそできたのである。

大型アーケード・ドームが完成してからというもの、中心市街地再開発事業の成功例として、全国の寂れる地方商店街組合からの視察観光バスは、絶えることなくやって来ている。

しおりは雨をさけるように、バッグを頭にかざしながら、急ぎ足で立体駐車場の前を過ぎようとした時、前方から傘さし自転車が突っ込んできた。

とっさに避けたが、よろけたはずみで立体駐車場一階の自転車置き場から出てきた若い男にぶつかってしまった。香西しおりのビニール傘が舞った。

男のポケットからシルバー色に光る物がこぼれ落ちて、歩道の上で回転した。「おにいさん、ぶつかってごめんなさい。デジカメ落としたでしょう。壊れませんでしたか」

男はあわてて落とした物を拾い上げると、すばやくポケットに戻した。いかした男は田中陽太郎である。「ぜんぜん大丈夫ですよ。心配しないでください。それにしてもこの街は自転車が凶暴ですね」

男は落とした物の正体がしおりに気づかれなかったことに安堵した。落としたシルバー色の手のひら大の金属物は、オールステンレス仕様のコルト25小型ピストルであった。

しおりはたいしたことがないことを確認すると田中と別れ、先を急いだ。

駆け足で離れていくしおりのあとを追うようにして、田中はゆっくりとした足取りでしおりの行き先と同じ県歴史資料館方向に歩いていった。

#### 4. 郷土史研究家の講演

香川県歴史ミュージアムは5年ほど前に、巨額の資金120億円を投じて香川県が香川県史の啓蒙にと、高松城跡の北東一角に建設した大型文化施設である。

無駄な箱物と非難されないように、施設有効利用として、県民に歴史を身近に感じてもらうために、さまざまな催しが企画されている。

今日の催しは、人気の郷土史家・多賀満夫による講演がこれから始まろうとしていた。演題は「丸亀町再開発にともなう遺跡発見とその破壊」である。

しおりは開演時間にぎりぎり間に合い、入場することができた。会場はすでに200人以上の聴衆で満席だった。

演台に登った進行役の若職員が、申し訳なさそうにマイクをとった。「開講時間が来ましたが、たったいま多賀先生から連絡がありまして、10分ほど遅れるので皆さまには歓談



でもして、時間つぶしをしておいてくださいとのこと。もうしばらくお待ちください」

会場は少しざわめいたが、すぐに見知らぬ隣同士での談話が始まった。みんな65歳以上の年金受給者で裕福そうに見え、男はパパスの衣装、女はティファニーの装飾で飾った元気な老人たちが近況報告に話を咲かせていた。

「先週まで地球の裏側の天空街マチュピチュへ、15日間の遺跡観光をしてきましたのよ。ビジネスクラス席の飛行機往復はとっても楽でしたわよ。180度横になっても前の席に足が届かなかったわ、つぎはどこの国へ行こうかしら。いい所があったらあなた教えてちょうだいな。フ・フ・フッ(笑)」

「あらあ、あたしもきのうまで年金使ってハワイで遊んできましたのよ。でももう暑いハワイは飽きちゃった(笑)。次は南極クルーズにでも出かけてペンギンちゃんと握手してこようかしら。ホ・ホ・ホッ」

あちらこちらの席からジイさんバアさんのお気楽ムードの会話が、周りに聞こえようがしに交わされていた。

母の介護で悩みを持つしおりは不快な気分でも聞き流しながら、隅の席で講演が始まるのをまっていた。

「お待たせしました。郷土を愛する歴史研究家・多賀先生の登場です。どうぞ拍手でお迎えください」

多賀は地元高校で日本史を教え、校長職をへて定年退職後は、ぼけ防止のために積極的にボランティア活動をしていた。高松城の発掘遺跡について独自の歴史観で解説する無料講演で、知識年配者にはけっこう好評を博していた。

高松城周辺は近年の衰退する中心市街地を救済するための、税金を潤沢に投入した再開発事業箱もの建設が盛んである。

建築前には高松城跡遺跡調査が義務づけられている。担当調査機関は、開発箱もの建築が民間事業か公共事業かで、所轄が高松市になるか、香川県かが決まり、それぞれの教育委員会で遺跡調査が行われる。

今日の多賀の講演は丸亀町再開発の遺跡についてであるから、民間事業なので高松市教育委員会の調査報告をふまえての講演となる予定である。

聴講者の中には高校生時代に多賀先生に教わった人も大勢いるはずである。演台に立った多賀先生の顔色が悪いことに気づいたようで、登場を迎える拍手が細って消えた。

多賀満夫がせきこみながらゆっくりと話し始めた。

「遅れてきて申し訳ありませんでした。歴史好きの皆さまにも関係があることなのでご報告させていただきますが、先ほど井戸遺跡を調査していた香川県立歴史資料館の栗屋学芸員さんが、何者かにピストルで撃たれて亡くなりました。高松城周辺の発掘調査責任者だっただけに、残念無念です」

会場には重い空気がよぎった。

「3日前には四越高松店の敷地内から発見された大型井戸を調査していた、高松市学芸員

の大川学芸員がピストルで撃たれて殺されたばかりだというのに。今回も遺体の額には『丸にクルス紋』が血で描かれていました。おふたりとは高松城築城の歴史を一緒に研究して、遺跡保存のありかたについて意見をぶつけあってきましたから、友を失い私は非常に悲しいです」

進行役のはからいで、死んだ2人への一分間の黙とうがおこなわれた。さすがに、ふだんお気楽なジイさんバアさんたちも神妙な顔つきになった。

「高松城から発見される遺跡は、開発場所によって発掘調査が県と市でばらばらに行われ、共同で調査をすることはほとんど無いのが現状です。縄張りを侵すべからずの縦割り調査です。私は高松城史跡を県と市が別々におこなう調査を、公務員定年をきっかけに公人の呪縛から解かれた開放感によって、自由な推理で真実の高松城の謎を解くことができるようになりました。」

2人が死んだあとは、高松城遺跡発掘の調査結果を語れるのは、俺だけと言わんばかりに、多賀は講演の本題にはいった。

さびれゆく地方都市商店街の再開事業で関係役所から公金(税金)を得るためには、商店街来客のための駐車場と駐輪場を、開発規模に応じた台数分を新規に確保することが条件になっている。

税金獲得に成功した丸亀町商店街再開では、四越高松店北隣りにあった、マクドナルドの『M』の看板が立っていた店舗跡に、駐輪場付自走式大型立体駐車場を建てた。

この駐車場建築前の高松城城内の歴史地区発掘調査中に、大きな井戸が発見された。「発見された井戸の名は、『血屋敷井戸』と古地図に描かれています。なんと恐ろしい名前でしょうか。血屋敷とはいったい何のことでしょうか。井戸の意味は何でしょうか」怪談調になった多賀の口調に、会場内には冷気が吹いた。

演壇の多賀の姿だけが浮き上がった暗い会場内の、奥の出入り口が静かに開いて田中陽太郎が侵入してきた。満員の椅子席の後方で気配を悟られないように多賀の話に耳をすませた。

多賀は高松市教育委員会が編纂した発掘調査報告書本を手にもち頭上に掲げた。本の表紙には血屋敷井戸発見場所が描かれた、江戸時代の高松城下鳥瞰屏風絵が印刷されている。「絵のこの場所に『血屋敷井戸』は埋められていたのですよ」報告書本表紙の屏風絵の真ん中を指で示しながらつついた。

「四越店高松店が建っている場所はここです。そしてこの通りが丸亀町商店街の場所です。江戸時代の通りや路地が、現在もそのまま残っているのが高松中心街なのです。古地図を片手に街角を散策すると戦国・江戸時代にタイムスリップできるのは、丸亀町を中心にして発展した街割りが今でもほぼ完璧に残っているからです」

暗さに目がなれた田中陽太郎は、すぐ近くの席に香西しおりがいることに気づき、少し離れた場所に移り、ようじんしながら身をひそめた。

「この大型井戸が発見されたときには、高松市教育委員会主催で現地説明会が3日間にわたり催され800人の視察者がありました。この会場には井戸遺跡を見学された方はいますか」

俺もわたしも見たぞとの多くの声で会場内がざわめいた。

「お集まりのほとんどの方が遺跡現場を見たようですね。現場説明会のあとに、精密な調査をしてまとめたのがこの報告書です。調査を終えて『血屋敷井戸』は取り壊され、井戸跡には丸亀町商店街が運営する立体駐車場が建っています。井戸遺跡は抹殺されました」

井戸が処分されたことを知り、会場内が凍りついた。日本人にとって井戸はつぶしてはならない、生命を守る神の宿る場所とされている。破壊した者は必ずのろわれ、地獄に落ちるたたりがあるといわれている。

「なぜ遺跡を破壊したのだ。なぜ次の世代に遺跡を残してやろうとしないのだ」怒りで身を震わせながら、田中の怒鳴り声がちんもくの会場内に響いた。

「駐車場建設に税金が使われている。井戸の破壊は丸亀町商店街だけの罪だけではない。税金の使われ方を監視する県民市民みんなが破壊を防がなければならない責任があったのではないのか」

田中の声の勢いに、多賀も聴衆もみながおびえた。ただひとり、しおりには田中の遺跡を守ろうとする気概がよく理解できた。

照明が多賀だけを照らしていたスポットライトから、会場の天井全体照明に切り替わった。

「ちょっと早い時間ですがこれから館内展示室に学芸員が皆様をご案内して、多賀先生がお話された高松城下屏風絵の本物を見ていただくことにします」

田中の怒りの発言で、これ以上講演は無理と判断した進行役が機転をきかせた。

公演室から吹きぬけエントランスの中央に案内された聴講客は、不快な駆動音を響かせるエスカレーターにのって3階にある常設展示場に案内されて行った。

3階の西ロビーからは、高松城跡である玉藻公園が一望できた。

天主台が建つ本丸や古い木造建築の粋を凝らした披雲閣、そして要所を守る豪壮な櫓(やぐら)がいくつも見下ろせた。

香川県立歴史資料館はバブルに興じた時期に計画され、120億円もの巨費を投じて讃岐・香川の大切な歴史を温存するための施設として建てられた箱物施設である。

広がる歴史パノラマな眺めの中に、玉藻公園の歴史的景観を台無しにする異様な近代建物が、高松城天主跡の奥から目に飛び込んできた。

30階建の公式名「シンボルタワー」が、天主跡を見下ろしていた。瀬戸大橋の架橋で廃止された本州とを結ぶ船の玄関を、巨大箱物を造り、四国の玄関の地位を死守目的で建設した高層ビルである。

シンボルタワーの設計はコンペになり、最終審査に丹下健三のプランも残っていたが、

なぜか落選した。採用されたのは、29階高層ビルであった。丹下の設計に勝ったのは四国で一番高い建物を建てるプランニングであった。

誰かがどこからか、「もう一階継ぎ足せば中四国で一番高い建物になるぞ」との噂を聞きつけると、約一億円工事費を追加してまでも高さで目立とうとした。

しかし、建築が始まるやいなや、広島市にはすでにこれよりはるかに高いビルが建築中であることが判明して、高さで自慢するシンボルはいちども「中四国で一番高いビル」を達成することはできなかった。

展示場入口では改札員が入場券のチェックをはじめた。65歳以上は年齢を証明するものを示せば、長寿者優遇の対象になり無料で入場できる。改札員は年齢を満たしていないしおりと田中に1階受付まで戻って入場券を買ってくるように案内した。

しかし、観覧料400円はしおりと田中の貧しいふたりにとってはとても重い金額であり、学芸員の解説をぜひとも聞きたかったが入場することをためらった。

## 5. 血屋敷井戸の怨霊

その夜、閉館した高松市立美術館の館内。

雨はすでにあがり、雲間から現れた満月の明かりが、エントランスホール天井のガラス天井を透してナガレバチを照らす。

ひとりで木目は3階館長室に残り、集客増員計画の企画書を作成していた。

暗い廊下から足音がする。館長室入口ドアが静かに開けられて、現れた男は田中であった。

「どなたですか。どこから入られたのですか。今日の観覧は終了しましたよ」押し黙ったまま突っ立つ田中に、木目館長は驚いて椅子から離れた。

田中陽太郎はベストから取り出したコルト25の銃口を、木目館長に向けるとおもむろに言った。

「2人の学芸員を殺したのは、オレだ。次は館長、おまえの番だ。おまえはこの美術館に天下りする前は、高松市役所土木部長を長らく務めていて、建築確認申請書に添付される地層ボーリング調査報告書を審査する責任者であった。高松市内のすべての地下をだれよりも知り尽くしている人間はお前だ。丸亀町商店街アーケードの地下にかくされた、世界を変えてしまう恐ろしい秘宝を、オレに教えてもらいたい」

「どうしてきみは、地下の秘密に気づいたのだ。これは我々フリーメイソンだけが守る秘密の宝だ。だれにも教えることはできない」

「おまえら役人の驚きぶりは異常だ。あわてて『血屋敷井戸』を破壊しただろう。これまで香川県内で出土した遺跡の中では、重要度最大級だ。しかも井戸には生命の霊神が宿っているというのに、完璧なまでに壊し、消し去ってしまった。香川県以外ならこれだけ貴重な遺跡が出た場所は、たとえ鉄道の駅の建設が予定されていても破壊を避けて、遺跡を

観光資源として次の世代へバトンタッチするのが常識だ。賢いおまえたちが意味も無くおそろしい名前の井戸を抹殺するはずはない。『血屋敷井戸』にはとてつもない秘密が込められていたはずだ」

しおりがデジカメと勘違いしたコルト25は、手のひらに収まるほどの小さな自動拳銃だ。0.25インチ、口径6.35ミリの小さな弾丸ではあるが、至近距離から撃たればダメージは大きい。

「どうしても秘密はしゃべらないと決めているようだな。しかたがない。この一発は井戸の祟(たた)りと思ってもらいたい」

手のひらを強くたたいた程度の音がして、木目館長の右腹部に6.35<sup>ミ</sup>の弾がめり込んだ。血が噴出す傷口を手で押さえながら、木目の膝がよろけながら床に崩れた。

「イエスと同じ場所からの出血で声が出なくなったようだな。もっと苦しんで、井戸の怨霊の怒りを知ってみるがいい」

10分もしないうちに木目館長の命が絶えると確信した田中は、もと来た廊下を戻り美術館から暗闇の中へ姿を消した。

木目館長は襲う激痛をこらえ、美術館内の階段とスロープで複雑に組み合わさった廊下を這うようにして1階のエントランスホールにたどり着いた。

携帯電話を胸ポケットから取り出すと、震える指をかすれる目で追いながら、どこかに宛ててメールを送った。

そして、残る力で傷口から湧出る真っ赤な血を両手で受けると、顔全体になすりつけた。木目館長の顔はまるで、酒に酔った赤ら顔のように鮮血でメイクされていた。

よろけるようにしてナガレバチまでたどり着くと、台座の上に登り背中をバチにもたれかけてあぐらをかいた。残る力をしぼりきるように腕をくむと、木目の呼吸が止まった。

## 6. 商店街のうどん屋

丸亀町商店街の一角で開店しているうどん屋からにぎやかな会話が響いている。近隣のオフィス街で働くサラリーマンたちが会社帰りにくつろぎを求めて、さぬきうどん店足立屋に集まり、飲み仲間と歓談していた。

足立屋では新人客が来るたびに、古参の客はビールジョッキを掲げて乾杯の音頭をとり連帯感を深めていた。

客が飲みほすビールは、セルフサービス式うどん屋ならではの面白いビールである。カウンターに出向いて、ビールの代金450円を払い、注がれた中ジョッキを受け取ると、セルフうどんのトッピングに用意された具を、ジョッキからあふれんばかりに盛りあがったビールの泡の上に重ねるのである。

一番うまい飲み方は、きざみネギとおろしショウガをぶっかけて飲む、ジンジャー葱ビールである。

足立屋の店内の奥に歴史展示コーナーが設けられている。飲み客に話題を提供できればとの、店主足立オーナーが配慮した店構えである。

香川県立歴史資料館の展示室入館をあきらめて、戻ってきたしおりが店内で働いていた。足立屋で雑用役のアルバイトをして日銭を稼いでいた。

展示コーナーに飾られているものは、丸亀町再開発事業の発掘調査で見つかった、出土品を集めたものである。欠けた瓦や茶碗、錆びた刀や古銭など。高松に初めて城を造った生駒親正(1526～1603)に係わる遺物を展示している。歴史愛好家にはたまらない品々である。

その中でもひととき酔客の注目を集めていたのが、生駒家の家紋・御所車紋と、丸の中に十のクルス紋が彫り込まれた『血屋敷井戸』の要紋石であった。

ひと抱えもあるハート形をした大きな石は『血屋敷井戸』の枠を構築するため、積み石の最後に重ねる締めめに置かれた要(かなめ)の岩である。

高松市教育委員会の調査では、井戸を構成する石を一つひとつ調べつくして産地を特定しているが、肝心の要紋石だけが産地が未確認であった。このハート形に二つの家紋を彫り込んだ要紋石には、どのような意味がこめられて、どこから運びこまれてきたのだろうか。

きちんとした背広姿の中年客がしばらく紋石をさすっていて、突然声をあげた。「この石の産地を知ってるよ。このしっとりした肌触りの感触は、ヨーロッパの最高峰モンブランから産出される聖なる岩石です。世界各地を転勤した自分にはそれが分かります」

官庁や大企業は四国の出先として高松市を選び、高松市は支店都市として発展してきた。この街には世界中を転勤してきた支店長クラスの大物人材が大勢活躍している。高松には彼ら転勤族の、豊かな知識・経験による情報文化が豊かに持ち込まれている。

夜の8時になった。うどん足立屋の閉店時間がせまり、すべての客が引き払ったとき、腹をすかせた田中がふらりと店に入り込んできた。

「遅くにすみません、かけうどんの大をたべさせてもらえませんか」うどん玉の数が1玉なら小、2玉なら大である。

代金260円を田中が払おうとすると、店のレジを担当する足立屋オーナーの息子が拒否の手を振った。

「閉店前の売れ残りで延びたうどんでもよかったらご馳走しますので、食べてください。・・ねえ、無料でいいですよ、おとうさん」

製麺室から顔についたうどん粉を腰のタオルで拭き落としながら、ひとのよい足立屋のオーナーが現れた。「どうぞ、食べていってください。食べ盛りの若い人は、外食代がかかって大変でしょうから。」

食器洗いを終わらせたしおりが厨房から出て、田中に気づいた。「あら、多賀先生の講演で会った人でしょう。偶然ね」

「また会いましたね。あれから僕は展示場へは入らずに帰りましたよ。ちょっとお金が足りなくて、うどんなら食べられるかなとここに来てみたら、親切にご馳走になっちゃって大助かりしています」

「ここのご主人たちが優しい人でよかったですね。私はバレエ教室の指導が本業で、時間が空いたときは足立屋でアルバイトをさせてもらっているのよ。」

しおりが店のシャッターを腰の高さまで下ろすと、後片付けの掃除が始まった。

田中はうどんのつゆを全て飲み干した。「ごちそうさまです。たいへんおいしかったです」

どんぶり鉢を返却口に運んでいて、展示の出土品に気づいた田中。「ここに並べてある石はなんですか」

しおりが答えた。「これは『血屋敷井戸』の縁石(ふちいし)よ。石は屋島の東隣りの五剣山から切り出されたものと認定されたのだけど、このハート型をして二つの家紋が彫り込まれた要紋石(かなめもんいし)の産地だけが分からなかったの。でも今日のお客さんがモンブラン頂上の石と教えてくれたわ。ほんとかしらねえ」

田中は要紋石をやさしくさすった。

「間違いなくモンブランの岩石です。僕はついこないだまでヨーロッパ中を歩き、路上で色紙に漢字を書いて売りながら、貧乏旅行を三年間してきました。きっかけは映画『ダ・ヴィンチ・コード』を見て感動したことです。どうしてもルーブル美術館のガラスのピラミッドが見てみたくなって、後先を考えずにパリに行きました。」

パリと聞いて、しおりは驚いた。

「映画ではジャン・レノがガラスのピラミッドをパリの顔の傷と断罪していて、オレもそのとおりに思っていたのに、『ダ・ヴィンチ・コード』を観て認識が一変したのです。もう、何が何でもルーブル美術館の逆さに重なり合う二つのピラミッドを見たかった。そして、その下に『マグラダのマリアの棺』が隠されていることを確認したかったのです」  
片づけをしていた皆の手が止まって、田中の話に聴き入っていた。

「で、ルーブル美術館には、『マグラダのマリアの棺』はありましたか」と、しおりが田中に聞いた。

「ガラスのピラミッドは美しかった。もう、エッフェル塔とともに、パリにはなくてはならないシンボルとなっていました。でも、ルーブル美術館の重なるピラミッドの下には、『マグラダのマリアの棺』は、どこにも無かったようにオレには思えました」

なんだ、がっかり。店内ではあわただしい片づけが、ふたたび始まった。

足立は携帯に一本のメールがあることに気づいた。

「あれれ。メール操作がにがてな木目館長からのメールだ。こんな時間にメールをよこすなんて何があったんだろう？」

木目館長からメールと聞いて、田中はギョツとした。高松市立美術館木目館長とうどん屋足立屋のおやじが、どこでどうつながるといふのだ。

田中の頭の中はぐるぐる回った。そして確信した。足立も『血屋敷井戸』の秘密を知っ

ていて、井戸の破壊にかかわっていた人間なのだ。

田中が殺さなければならない4人目は、足立だったのだ。

## 7・ 夜の美術館

木目館長のメールは、足立に助けを求めている。足立は美術館の間取りをよく良く知る、しおりを連れてアーケード商店街に隣接する高松市立美術館へ急いだ。

玄関前にある台座の上のガラスの三角錐は常夜灯のように明かりがともり、足元を照らしてくれるが、閉館した美術館の正面玄関自動ドアは開かない。

「どこから中に行けるのだ。開く扉はどこにあるのだ」

「足立さん、地下にある高松市立美術館駐車場は高松市立美術館とは別の経営母体で運営されていて、ふたつはどこかに緊急用の通路があったはずだわ。そこにあるドアは、たまたまロックがされてないことがあるわ。行きましょう。わたしについてきてください」

玄関横の地下駐車場へとつづく車両侵入スロープをふたりは駆け下りた。

足立が木目館長のメールを見たのは、発信されてからすでに一時間がたっていた。

足立としおりがエントランスホールに着いたときには、すでに木目館長はナガレバチの台座にあぐらをかき、背中をバチに寄りかかって絶命していた。

血で真っ赤に染まった顔。おでこには久米館長みずからが血と指で描いた、丸にクルス紋が描かれていた。

戸惑うしおりと足立の背後に男の気配がして、ふたりが振り返ると、あとをつけて来た田中が無表情の顔で近づいてきた。

「貴重な遺跡をぶっ壊した犯人には、天罰が下されて当然なのだ。大罰(おおばち)当たりのおとなを僕がもうひとり地獄に落とすところを、しおりさんにはしかりと見ていてほしい」

田中はピストルを足立の心臓に向けた。

「やめなさい。人を殺す権利は誰にも無いわ」香西しおりは叫ぶと同時につま先をバレエを踊るように、ピストルを持つ田中の腕を跳ね上げた。

エントランスホールを響かせて発射された弾は、天井のガラスにはね返ってナガレバチの回りでころがった。

「オレの邪魔しないでくれ。文化遺産を守らない者に、生きる資格はない。天誅がくだされて当然なのだ」

田中はふたたびピストルのトリガーを引いた。発射音がしない。弾切れだった。弾装に弾を詰め替えようと、マガジンを確認するすきを見て、足立は田中に体当たりをくらわした。

「しおりちゃん、ここから逃げるのだ」

高松市立美術館の動線は1階から3階までを、エントランスホール周りを3周するよう



に螺旋のラインで設計されていて、通路は階段部分やスロープで変化にとんだ組み合わせで、しかも床仕様が石張りやカーペット、プラスチックタイルだったりする。色模様も違えてあるので、県都の美術館としては小さな建物だが、来館者を展示室まで招く歩く工程を楽しくさせてくれる配慮がなされている。

暗い館内で襲われたしおりと足立は、やっとのことで美術館の外へ逃げ出すことができた。

## 8. うどん鉢のようなドーム

美術館を脱出すると、50歩も走らないうちに丸亀町商店街に出る。防塵用の幕で覆われた店舗は、再開発事業の解体工事の真最中である。

足がもつれて転びそうになった足立の腕を、しおりは支えるとアーケードに沿って北に進んだ。

防塵幕が途切れると、1年前に完成した二棟の7層階ショッピングビルが現れた。丸亀町商店街の再開発は、450mの商店街を横断する路地で7つの区画で分け、区画ごとに工期をずらせて新築がなされている。

1番目に完成したのが丸亀町北端A街区で、防塵幕で囲まれ只今工事中の区域がB、C街区である。

今後さらに南へ、D～Gと店舗の建て替えが続き、7区画のほぼ全ての既存店舗が60余年前に焼け野原から不死鳥のように再生したように、新しいビルへと生まれ変わる計画だ。

全国地方都市の中心商店街は、昭和20年の敗戦廃墟から、商人独自の財力で復興をなしとげたが、平成20年の大型郊外ショッピングセンター攻撃により中心商店街はシャッター通りに変わり果てた。国・県・市は税金投下で商店街再開発を促し、丸亀町はそのモデル商店街となり、建替工事がなされていた。

A街区ビルの完成と同時にアーケードの北端にガラスのドームが再建された。国の「中心市街地活性化法」による支援の成功例のシンボルとして、政財界が全国から連日のように視察に訪れている。

丸亀町が『T』の縦棒なら横棒と交差したポイントがドームの位置になる。横棒にあたるアーケード商店街は江戸時代の高松藩時代には、高松城の外堀を明治時代に埋め立てて商店街になった兵庫町と片原町である。

三町の商店街が突き合わさる広場の上のアーケードドームを略して『三町街ドーム』と呼ぶ。

イタリア・ミラノのガレリアに相当する巨大なドームは4代目で、初代のドームがB29の標的にされたものである。

買物客の中には「なんだか、原爆ドームみたい」とささやく人もいるにはいるが、白いペ

ンキで塗られた太い鉄骨が照明に照らされ、きらきら輝く4代目三町街ドームは、真下から見あげれば、まさにダーツの的に見えるのであった。

三町街ドームの完成は、地方都市中心街再開発の成功のシンボルとなり、新しくなったドームの下では商店街若手組合員らが、かつての賑わいを取り戻すためのイベントが連日のように催されている。

ふたりは三町街ドームの下で、人ごみのなかで身動きがとれなくなっていた。ドームのガラス面に、鐘や太鼓の大きな音が響きわたる。

今晚は高松の氏神神社岩瀬尾八幡宮の宵祭りだ。神輿や山車がドーム下に集結し、ハッピを着た店主らが歓喜の声をあげて、商売繁盛を願っている。

追いかけてきた田中も人ごみにはばまれ、しおりと足立を見失いそうになるが、A街区ビル2階へ向かうエレベーターに乗り込んだふたりを見つけた。

田中は横のエスカレーターを駆け上るとピストルを手に、ドアが開き足立が出てくるのを待ったが、エレベーターはそのまま進み3階で止まった。3階は飲食店が並び、通路からは近隣繁華街のネオンの夜景が色にぎやかに見える。

何度か田中は足立に銃口を向けたが、短身のコルト25では狙いが定まらなかった。が、ついに追い詰められた。鐘や太鼓の騒音の中では小口径のピストルの発射音は消されてしまい、足立を射殺したとしても田中は人ごみに紛れて逃げ出すことができるだろう。

田中が引き金を引いた瞬間、しおりと足立の体が田中の前から消えた。ふたりは三町街ドームの進入口に逃れたのだ。

再開発で建築される構造物は、足立が中心になって設計プランを立てていたもので、このようときどこへ避難すべきか、足立には迷うことはなかった。

進入口からはドームの頂上に登れる、ガラス拭きに足場となる梯子が掛けてある。三町街ドームを横から見たデザインはユニークで、半球の上に円盤が載せられている。

その形はまるでどんぶり鉢を逆さに伏せたようである。円盤はさしずめどんぶり鉢の高台である。高台がどういう意味をもってドームの上にデザイされたのか、当の設計者にも分からないという。なにか大きな霊に導かれるようにして、デザインがどんぶり鉢になったと設計者は言っている。さて、その霊とは、いったいなんの霊であろうか。

ドームの高台までよじ登ると、ふたりはひと息ついた。田中の気配がしなくなっていたからである。

ドームは内側から強い照明でライトアップされていて、夜の中心街モニュメントとして存在感を示していた。田中は照明の眩しさの中で、ふたりを見失ってしまったのだ。

田中は手のひらに隠したコルト25を携帯電話に持ち替えると、メールを操作した。あて先は格差社会を話題にした、閨サイト『格差世代』である。

団塊世代以上の年代が年金で楽しそうに暮らしているようすを、年金を払いたくても払えないワーキングプアが憤るブログである。

田中は『血屋敷井戸』を破壊した関係者を許さない理由を書き込みして、田中と同じように負け組み意識の若者の共感を得ていた。

発信されたメールには「三町街ドームにて4人目を見失った。みんなで探してくれ」とカキコされていた。

ネオンの喧騒にも負けない満月を眺めているうちに、楽器の音が止んだのでしおりはドームの下を覗いた。もう田中はあきらめて帰っただろうか。

商店街は通常の人通りに戻ろうとしていたが、何かを捜し求めるようなそぶりの若者がドームを見上げながら集まり始めていた。

「足立さん、たいへん。私たちを探す人が増えてこちらに迫ってくるわ。逃げましょう」

「こちらの梯子から降りれば、4階から上のマンションのベランダを伝って逃げる事ができる。さあ、こっちに急いでついて来なさい」

## 9. カヌーで脱出

四越高松店は、片原町商店街が三町街ドームに突き当たる北側で隣接する。

この位置は丸亀町商店街からすれば、北東の方角になり、鬼門の場所に三越高松店が建っていることになる。

たしかに、四越高松店が昭和の始めに高松に進出してからは、郊外に巨大ショッピングセンターが乱立するまで、江戸時代前から優位な小売業をしてこられた老舗商店街にとっては、鬼のようなライバル業者であっただろう。しかし大型郊外店の乱立は、商店街のみならず、名門四越百貨店の売り上をも脅かした。

中心市街地再開発事業は、商店街と四越高松店が生き残るための共同事業でもある。血屋敷井戸を壊した跡に建築された自走式大型駐車場は、四越が所有する土地に、行政の補助金を得た丸亀町商店街が建築所有して、運営しているのである。

四越高松店玄関前をそのまま北に越えると、街並みは商業街から一転してオフィス街へと変貌する。

地元TV放送局の本社が建つ場所は、空襲で街が丸焼けになるまでは、香川県庁舎が置かれていた。

県庁舎はのちに場所を移し、丹下健三の設計で再建された。50年余を経た今も丹下健三が残した県庁舎の、デザイン評価は高まるばかりである。

しおりと足立は、石垣で囲まれ海水で満たされた堀に着いた。ここから先は約400年前に造られた高松城城跡である。城跡は東京ドームの約2倍あり、「高松市立玉藻公園」として市民に入園料200円で公開されている。江戸時代の高松城は今の玉藻公園10倍の広さがあった。東京ドーム約16倍である。

城の全てが三町アーケードドームの中心から半径1, 2キロメートルの爆弾投下範囲の

中に納まっていたにもかかわらず、爆弾は中堀から南側で爆発炎上した。

高松城の被害はきわめて少なく、城門と倉庫が燃え落ちただけです。同じ日に空襲を受けた姫路城も、神仏の加護で災害をのがれている。高松城と姫路城の城郭を設計したのは400余年前、豊臣秀吉の軍師にして城造りの名人、黒田勘兵衛考高・如水である。

江戸時代の高松城の外堀があった場所は、今の兵庫町、片原町がある通りであるから、当時の城の面積は現在の4倍もの広大な広さがあったのである。

内堀の外側に沿って敷かれたレールづたいに、走った。息が激しくなりながらも、足立は逃げ道を考えていた。

「高松港まで行けばなんとかなる。JRでも船でも乗れる。コトデンで琴平へ向かうことも出来る」

高松築港はかつて四国の玄関とまで言われた、交通網の要であった。瀬戸内海で隔てられた四国本島と本州の重要路線を結ぶ連絡船が、絶え間なく発着していた町が高松である。今でも各交通機関四国の始発駅が高松築港に集中している。

ふたりが高松城内堀の一部を埋め立てて、ホームを本丸に接合させた「コトデン高松築港駅」まで逃げて来たとき、琴平から来た電車が終着駅の高松築港駅ホームに到着しかけた。

しおりが異常に気づいた。「足立さん。電車の中を見て」

車窓にはアーケードに集結した若者と同じ目つきをした10人ほどの男女が明石をにらんでいた。

「まずいわ。電車で遠くから私たちを探しに参加に来たのだわ。船で岡山県にわたりましょうか」

「だめだ。着岸の船からも僕らを狙って何人もが下船している。左手のJR高松駅からもっと多くが押し寄せてきた」

ふたりは行き場を失った。

「玉藻公園へ逃げ込みましょう。わたしについて来て」

しおりは足立の手を引くと、コトデン築港駅の改札を振り切って、ホームに進んだ。

到着した電車のドアが開き、二人を狙う若者が掴みかかろうとする瞬間、しおりは足立の体をバレーでリフトするように抱き上げて、ホームの柵越えに放り投げた。

ホームは高松城の内堀に設けられていて、柵の下5メートルには中堀と同じように海水が引き込まれている。

足立の体が海中に飲み込まれると同時に、しおりも飛び込んだ。柵に駆けつけた若者たちは、暗闇の中で堀の石垣で跳ね返る水面を見つめていた。

明石を捕まえるという同じ目的で集まった若者たちは、不思議なことに誰一人として声を出すものはいない。ただ誰とは知らない闇サイトの主からのカキコを、形態でチェックしているようすが異様であった。

三町街ドームに集結したグループが遅れてそぞろホームに集まりだした。その中に誰にも感づかれないように闇サイトにカキコする田中も紛れこんでいた。

田中はここに集まった群集は、『血屋敷井戸』を守らずに破壊した者に天誅を下す仲間だと理解した。

さらに足立を追い詰めるよう指示するメールを闇サイトに書き込み発信すると、隣に発信者がいるとも知らない若者たちは、柵の横に築かれた城の石垣から玉藻公園に侵入しはじめた。

とそのとき、駅員の通報を受けた5台のパトカーがサイレンを鳴らせてこちらに急行するのが見えた。若者たちは驚き、ホームから一目散に逃げたのであった。

ホーム横の低い石垣をよじのぼり、玉藻公園内に入れたのは田中だけであった。

内堀に飛び込んだふたりが水面に浮き上がった。

「ひどいよ、しおりちゃん。いきなり堀に落とすなんて。僕は今年60歳になって老人の仲間入りをしたんだ。大事にあつかってもらわないと怒るからね。ああ心臓が止まるかと思ったよ。」

「何が大事にしてよ、老人よ。大事にしてほしいのは私の方よ。足立さんのおかげで私の命まで狙われることになってしまったじゃないの」

しおりと足立は内堀で隔離された高松城の本丸に泳ぎ着いた。

「しおりちゃん。これからどうしよう」

足立には考えが無かった。

「私はお昼のアルバイトで、高松城天守閣再建のための石垣調査をやらせてもらっていることは、足立さんは知っているわよね。天守閣を復興するには、まず、経年で痛んだ石垣を調査することから始めなければならないのよ。その調査を私はカヌーに乗って、堀の水面から観察しているの。調査をしないときはカヌーを堀の中に沈めて隠し、入園者の気分を壊さないように配慮しているのよ」

「そのカヌーはどこにあるの」足立が周囲を探した。

しおりは堀の水中に潜ると、沈めてあったカヌーから重石の石を取り除くと、カヌーはゆっくりと水面に姿を現した

カヌーの品名はパムリコ140。船長4、2名の二人乗りポリエチレン製・カヌーだ。船内に残った海水をペットボトルの頭を落として再利用したベラーで掃きだすと、しおりは船尾から素早くカヌーに滑り込んだ。そして、立ち泳ぎで助けを待ってる足立の背中をつかむと、ひょいとカヌーに引き入れた。

強い力で引っ張るのではなく、バレエで鍛えた効率的な力の配分による技で、しおりの2倍もあろうか太った足立をみごとにパムリコの前席に座らせると、後席に戻ったしおりはパドルをしならせて漕いだ。

「堀を出て、瀬戸内海にでましょう。海に出れば何とか逃げ延びることができるでしょう」

高松城の堀は瀬戸内海の海水がそのまま注水されている。したがって堀の水面は、瀬戸内海の海面と同じ高さで同調している。

暗闇にピストルの音がして、カヌーに当たった弾がはねた。田中がふたりを見つけたのだ。田中とカヌーに乗ったふたりの距離があれば、コルト25の小さな弾の威力ではまともに届かない。

田中は野面積みされた石垣の、大石のすき間に詰め込まれたゴロタ石をほじり出すと、足立に狙いを定めて次々と投げつけた。

剛速球で投げ出されるこぶし大の石が、カヌーの横をかすめる。頭にでも当たれば即死だろう。

しおりはカヌーを堀の海水導入口まで進めた。

「瀬戸内海へ逃げましょう。堀から海に続く海水導入トンネルを抜けるには、除塵フィルタを2箇所はずして超えなければならないのよ。作業時間は3分必要よ。そのあいだ息を3分間、180数えるまで止めて欲しいの。できるかしら」

足立はあせった。「そんなの無理だよ。もともと高血圧で60秒でも無理ですよ。」

田中の投げる石がカヌーに当たり、鈍い音を立てた。

足立に息を止めさせるのは無理と判断したしおりは、カヌーを揺らすとふたりを乗せたまま転覆させた。

水面に腹を見せたカヌーの船腹には空気が満たされていて、しおりと足立はパムリコを頭にかぶるような姿になり、呼吸をしながら、海水導入口除塵フィルタまで進むことができた。

カヌーの底がヘルメット代わりになり、田中の投げるゴロタ石をはね返してくれた。

金網でできた除塵フィルターを引きはがして、瀬戸内海に逃れたふたりはカヌーに乗りなおすと、高松港の沖で漂っていた。

「さあ、足立さん。これからどこに向けて漕ぎましょうか」田中の追っ手を振り切った安堵で、しおりは足立に行く先を求めるのであった。

「そうだなあ。こんなとき頼りになるのは、滝上正江だろうな。しおりちゃん、カヌーの船首を東に向けてくれないか。正江さんが企画したレトロなショッピングモールへ行くことにしよう」

ふたりの乗ったカヌーは月夜の海を、『北浜マリーナ』に向けて漕ぎ出した。

## 10. 亀甲船形の県立体育館

『北浜マリーナ』は江戸時代に米や砂糖を江戸に運ぶ船着場に造られた倉庫群が、近代流通の変化で御用済みになり、廃墟となっていた建物を、若者向けにおしゃれなショッピングモールへと変身させた、いま話題の繁栄スポットである。

忘れ去られ、利用価値の無くなった壊れかけの倉庫群エリアが、ひとりの商業環境デザイナーの企画で光かがやくエリアに生まれ変わったのである。

その天才建築デザイナーは滝上正江さん。足立とは同じ讃岐高校を卒業した団塊世代の時代の同級生である。

足立は今ある建物を、空襲で廃墟になったゼロから再生した繁栄を、行政の支援を得てカネをつぎこみ高松の繁栄を取り戻そうと画策する。滝上は、時代に残された取り壊し寸前の建物にふたたび命を与え、カネをかけずに行政に頼るより高松の繁栄を取り戻そうと画策している。どちらも、目指しているのは、高松中心街の活性化である。

しおりと足立は、滝上に救いを求めて北浜マリーナの船着場にカヌーを寄せた。北浜マリーナには若者を対象とした、さまざまなショップが夜遅くまで営業していた。滝上もおしゃれな喫茶店を出店していた。

足立はしおりをつれて滝上の店に行った。が、入れ違いのように滝上は外出したところであった。

店員が言うところでは、恩師の多賀先生が体調を崩したので県立歴史資料館に迎えに行き、こちらには戻らずに別荘に帰るのではないかとのことである。

「しおりちゃん。滝上さんの別荘に行こう。今では頼れるのは滝上さんだけだ」

しおりは足立にこれからを任せるしかなかった。「滝上さんの別荘は、どこにあるの」

「それは、ほら、あちらだよ」足立が指差したと先には月夜の明かりに照らされた屋島、登山ケーブルカー山頂駅であった。

屋島に行くなら、北浜マリーナの前に停車するコトデン朝日町線バスに乗れば早いと、店員が教えてくれた。

しおりは、屋島へ行くならバスよりカヌーのほうがずっと近道コースでいけるので早いと思った。「足立さん、カヌーを漕いでいきましょうよ」

「やめてくれよ、しおりちゃん。カヌーで船酔いしたみたいで、これいじょう海にいたら死んでしまいそうだよ」

ふたりが乗った乗合バスは順調に屋島に向けて東に走ったが、あと半分の距離で北に向きを変えた。しかたなくふたりは、『平家物語歴史館前』バス停で降りた。

『平家物語歴史館』は8百余年前に、源氏と平家が合戦を繰り広げた「屋島の合戦」を中心に平家物語の名場面を実物大の蝋人形で再現してみせる大規模な民営歴史館である。

ここからあと3キロ歩けば屋島に到着する。バスを降りたしおりが、目の前の異様な建物を見て驚いた。照明に照らされた巨大な亀形をした建物が、ふたりの前にそびえ建っていた。

「これって亀なの、船なの。この建物がここに建つ意味はなんなのかしら」

「しおりちゃんはこの建物を初めて見たのだね。驚くのは無理も無い。これは世界の丹下

健三が設計した香川県県立体育館だよ。県立としては余りに奇抜すぎるデザインに、完成当時から、丹下健三がこの建物に込めたメッセージが分からないでいるのだよ」

しおりは、県立で建てた体育館にしては、余りに小規模で奇抜な姿に、丹下健三のデザインに込めた意図を是が非でも知りたくなかった。

## 11. 秘密基地『みさご館』

屋島につづく歩道を急ぐふたりを、全くエンジン音を立てない軽自動車が抜き去ると突然タイヤをきしませて急停車した。運転席から滝上正江が降りてきた。

「足立君、こんな寂しい場所で美人とデートなんて、奥さんにいつつけちゃおうかしら」

「ここで正江さんに会えてよかった。誤解しないでくれよ。この子は僕を助けてくれているんだ。いまからふたりで、正江さんに会いに行こうとしてたところだったんだ」

助手席の窓が開くと、笑みを浮かべた老人が顔を突き出し、懐かしそうに足立に声をかけた。

「よう。足立よ、久しぶりだな。元気にしてたか」

「えっ。多賀先生ですか。お久しぶりです」

しおりも見覚えのある顔であった。昼間に県立歴史資料館で講演を聞いたばかりの講師が車の中にいたのである。

正江は足立としおりを、後部座席に誘った。

軽自動車は4人をシートに押し付けるほどの加速で発進したが、エンジンの音がまったく聞こえない。ただただタイヤのロード音がかすかに室内に聞こえるだけである。

「静かでしょう。この軽車はどこにでも走っている三菱自動車の「i」だけど、マフラーが付いてないの。なぜだかわかる」滝上の自慢そうな質問に、3人は解答できなかった。

「エンジンが無い車だから。電気自動車なのよ。まだ発売されてないのだけど、私がエコ活動に熱心なのを知ったメーカーが、私の感想を聞くためにモニター用に貸してくれたの。みなさんも三菱自動車にアドバイスしたいことがあったら、意見を言ってちょうだい」

「正江さん、それよりもわたし、あの亀の形をした県立体育館におどろかされたわ」

しおりの小さな声でも、静かな車内では少し耳が遠くなった多賀にもよく聞こえた。

「丹下健三が建築設計をするときには、これから設計する建物が求める真髓を、建築場所をおおう守霊や怨霊から聞き出して、設計に取り込んでいるのだ。世界の平和を願った広島平和公園しかり、香川の繁栄を願った香川県庁しかり、そして東京都庁舎もしかりなのだよ」

「え、東京都庁舎は丹下健三さんが設計者でしたか」

驚くしおりに多賀はつけ加えた。

「建物から発するパワーの運気を最大にするために、丹下は建築場所が発する歴史の波長をととても大切に設計していたんだよ」



電気自動車「i アイ・ミーブ」は静かに、そして俊足に春日川をまたぐ「屋島大橋」を渡りきると、屋島のふもとへと滑り込んだ。

屋島の山頂に登るにはいくつかの方法がある。

徒歩で登る遍路道があり、車なら有料ドライブウェイがある。3年前までは登山ケーブルカーが走っていた。

ケーブルカーの運休は、屋島観光客の激減で経営が成り立たなくなったからだ。

客の減少で苦勞しているのは、高松中心商店街ばかりではなかった。

「ドライブウェイは18時で閉鎖になっているから、明日の朝まで車で登るのは無理ね」

滝上は「屋島ケーブル登山駅」に向けて、ハンドルを切った。

「はい、車はここまでよ。あとは歩いて廃線を一直線に登るだけ。終点に建っている山上駅が、わたしの隠れ家になっている別荘『みさご庵』よ」

滝上はダッシュボードから懐中電灯を取り出し、4人の先頭になり、進んだ。

登山口駅のホームには、屋島が観光でにぎわっていた頃には、100人以上を詰め込んで走った「義経号」が寂しそうに停車している。

4人は急勾配に敷かれた軌道に沿って雑草を掻き分けながら進んだ。

高低差265m、距離850m。眼下には宝石を散りばめたような高松のすばらしい夜景が広がっていた。

4人を山頂で迎えてくれたのは、再び線路の中間ですれ違いざまに義経に会いたいと切なく渴望しているかのように、錆びた姿をさらすあわれな「弁慶号」の車輛であった。

「屋島山上駅」は昭和初期に建築された直線を生かしたモダンなモルタル3層建物で、屋上はビアガーデンに使われていたこともある。

秘密基地のような姿は昭和レトロを存分に感じさせてくれるが、ケーブルカーが運休してからは廃墟となっていたものを、滝上が保全維持を兼ねて、別荘『みさご庵』として居住していた。

待合室を改造して応接室に、滝上は3人を案内するとグラスに赤ワインを注いだ。「ウエルカムドリンクよ。どうぞお飲みになって」

登山で汗をかいた4人の体には、冷えたワインの渋みが心地よくのどにしみこんだ。

## 12. 血屋敷井戸のたたり

滝上が多賀先生を車で運んでいたのは、多賀が県立歴史資料館での田中の発言で少々予定が狂った講演をなんとか終えて、控え室で休んでいると、心労で軽い心臓発作を起こし、教え子である滝上に迎えを頼んだからである。

滝上は、商業施設の設計を依頼されるたびに、多賀の豊富な歴史知識を参考にしながら、

建築デザインに生かしている。

高松市は高松城を基点にして発展拡大した街であるから、新しく構造物を造るときには、スタートとなった高松城の設計コンセプトを理解すれば、今と昔の文明文化がうまく調和した、美しい街並みが造れるのである。

多賀は高松の人口がゼロから街を興した、生駒親正と、日本のダ・ヴィンチと称される天才・平賀源内の研究に優れていた。

多賀が甘え顔で、ワインのおかわりを滝上におねだりした。

「多賀先生だめよ、心臓が悪いんでしょう。もうやめときなさい」

しぶしぶグラスを引っ込めながら、多賀はぼやいた。

「講演中に若い男から『血屋敷井戸』を取り壊したことで反省を促されたのには、ほんとうにビックリした。確かに若者の言うとおりで。どうして井戸遺跡の保存をしようとしなかったのか。市民みんなで反省しなければならないと思う」

香西しおりは、しずかにうなずいた。

「大声を出した若者の名前は田中さんです。わたしも会場にいて、多賀先生のお話を聞いていました。」

赤ワインを手酌でおかわりした、足立がおびえた声で言った。

「殺された3人に続いて、田中は次に僕の命を狙い、襲われました。『血屋敷井戸』の取り壊しが原因だということは分かるのですが、発掘調査は充分におこない、報告書も製作を終えたんです。井戸を撤去しなければ、その上に駐車場は建てられないのです。」

ワインをさらについで一気に飲み干した。

「行政から補助金を受けて商店街再生をするには、地主が店舗を新築するだけでは支援が受けられないのです。開発の規模に沿った周辺整備が求められます。一定数の駐車場や駐輪場を新たに確保したうえで、集まりの広場や休憩用椅子、花壇でモールを飾ることも条件になっているのです」

足立はつわもの揃いの商店街地主をとりまとめながら、再開発事業の工事で発生する難問に対処してきた。

血屋敷井戸取り壊しについても、市から請求される発掘調査費 3000 万円は地権者三越が払うのではなく、丸亀町商店街組合が全額負担しており、高松市教育委員会から取り壊しを止められることはなかった。

しおりは昨年まで、10年間パリを中心にヨーロッパで暮らしていた。

「わたしは毎年お盆になると若年認知症になった母のようすを見に、地元卒業高校の同窓会参加を楽しみにして一時帰国していたのですが、高松に戻るたびに昔あった建物が建て替えられて、街の姿が毎年激変していたわ。特に平成16年に玉藻公園のすぐ隣に、30階建ての四国で一番高いことを自慢するシンボルタワーが建ったときには、その姿が周囲に馴染まない異様さに、腰を抜かしたものだわ」

しおりがドイツ・ドレスデンでゲスト・ソリストとしてバレエ公演をしたとき、高松と同じ戦争の空爆で壊滅した街並みを、崩れた壁石を一つひとつ拾いあつめて、元どおりの街並みを復興させた市民の努力を知ったとき、高松とドレスデンの文化レベルの違いを思い知らされたのであった。

「ヨーロッパでは、遺跡は昔のままの姿で残すことが常識になっています。今回の高松城井戸の遺跡が出土したら、ヨーロッパでは、たとえどのように重要な都市計画であろうとも、遺跡を保全して次の孫子世代に渡すことが、先祖の残した文化を、丁重にうやまう行為として最優先されます」

滝上正江はうなずいた。「名前からして『血屋敷井戸』はおどろおどろしいじゃないの。つぶした者には絶対に祟(たたり)りが身に降りかかるぞと、だれかが警告を込めて井戸の名前を古地図に残しているのだわ。そうよ、決して壊すなど封印するための名称なのよ」

足立は納得して、恐怖に首をすくめながらつぶやいた。

「もしかして田中は『血屋敷井戸』の怨霊にあやつられて、井戸の破壊にかかわった人物たちをつぎつぎと殺しているのだろうか」

### 13. 日本のベネチア・高松城

織田信長が15歳のとき政略結婚で斉藤道三の娘・濃姫(14)を正室に迎えたが、優しく対せず、むしろ森蘭丸ら若衆と野山を駆けることを望んだ。女にさほど関心のない信長であったが1556年、信長25歳のとき7歳年上の美熟女を側室にした。生涯千人以上の女を相手にしたと伝えられる秀吉とは違い、信長の女気は妹のお市とこの側室だけであった。

側室の名前は吉乃(きつの)で、実家の生駒家は商売業である。莫大な財力を蓄え、間者といわれる忍者組織の情報網を構築していた。

信長にちょう愛された吉乃は翌年1557年には長男・信忠、さらに翌年には次男・信雄(のぶかつ)を生んでいる。

生駒親正(30)は側室・吉乃と身内の縁で信長に厚遇で仕えることになる。このとき木下藤吉朗(のちの豊臣秀吉)は19歳。2年前から信長軍団の下っ端で仕えていた。秀吉の活躍に期待した信長は、信頼の置ける生駒親正を、秀吉の補佐役につけた。

それから30余年後。織田信長に仕えて足軽から出発した秀吉の出世街道まっしぐらは、120年以上つづいた戦国時代の終盤を迎え、強敵徳川家康すらも支配下の五大名職に据えることに成功した。しかも天皇を私邸「聚楽第」に招待することをはたし、我が世の絶頂期を迎えていた。

1582年(天正10)明智光秀の謀反により、本能寺で織田信長が討たれたのちは、生駒親正は、加藤清正、福島正則ら直参衆10人余の中でも最高位となり、石田三成ら新参衆

の中にいる黒田官兵衛孝高とともに、秀吉から最も信頼される家臣として活躍していた。

1588年(天正16)4月のことである。生駒親正(62)が秀吉(51)から讃岐国の城主に任命されたのは一年前であったが、豊臣秀吉天下人の家臣にふさわしい城を築く場所がいつまでも決まらずにあせっていた。

古城がある引田、宇多津、由良山などを渡り巡ったが、納得がいかないでいた。生駒親正が拝した領地は、現在の四国香川県のうち、小豆島など一部を除いた讃岐の国である。

300を超える領地持ち大名が日本国内を分割するなかで、現在の都道府県割とほぼ同じ広い領地を任されたからには、生駒親正は秀吉の見栄のためにも、天下人の直臣にふさわしい、荘厳な城郭を造る任を負っていた。

なにしろ、安土城を建てて戦国の世の城の概念を一変させた、織田信長の直臣である豊臣秀吉軍団には、いかなる戦闘にも勝ち、安土城にもまさる城郭を造り、ライバル戦国武将の威圧し喝采を浴びることが求められていた。

生駒親正の地位はこのとき中老職にあった。中老職とは、徳川家康をはじめとする5強ライバル大名の五大老職と、石田三成ら五奉行の間を仲介する重職で、直臣の中では秀吉の身内を除けば最高の地位であり、秀吉の金庫番でもあった。秀吉を社長とする株式会社にたとえれば、監査役の地位である。

秀吉軍団の筆頭家臣の生駒親正が讃岐に新たに造る城を、全国の戦国武将は注目していた。

大坂から博多までを結ぶ瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ屋島は、寄棟屋根の形をした島の姿から名づけられている。標高約300mの山頂は南北が水平に長く伸びた台形で、真南および真北から見た姿は、ピラミッドの三角形に見える。

山頂の北端(北嶺)と南端(南嶺)には、高さ30mにも育った楠が一本ずつ、あたかも天主の屋根を飾るシャチホコのように植わっていた。

黒田官兵衛は大きな赤漆塗りのどんぶり鉢になみなみと注いだワインをいっき飲みしていたとき、生駒親正の言葉に驚いて鼻からブーと噴出してしまった。赤いワインのしぶきが生駒親正の顔にかかった。

「今、なんと言われた。新しい城の名前を高松城と名づけられると。生駒殿には正気かえ」

「ああ、いたって正気だとも。城の名前は高松城にしたいと思っておる」

黒田官兵衛の認識では、高松城は備中高松城のことで、秀吉が水攻めで落とした城である。

「よりによって、なんでまた、落城した縁起の悪い城と同じ名前をつけられるのか、生駒殿の気持ち、この官兵衛には理解しかねます」

「高松の名は、決して悪い名ではないぞ」親正は不思議がる官兵衛を見て、笑った。

「高松城を我らの手で落としたからこそ、それからの秀吉様の天下人への道が開かれたのではないか。高松の名は運をもたらす縁起のいい素敵な名前であるぞ」

たしかに、本能寺の変のあと、主君織田信長を殺した謀反人・明智光秀を速やかに羽柴秀吉に討たせた軍師は黒田官兵衛であった。

黒田官兵衛が練った奇策が、備中・高松城の城主を計算どおりの日程で切腹させたからこそ、誰よりも早く、秀吉が信長の敵討ちを成功させたのである。

中国大返しでは官兵衛は自身の城である姫路城を秀吉に差し出して、秀吉の信頼を得ている。

兵隊を備中高松城から京都へ一刻も早く急いで引き返すために、官兵衛は生駒親正に知恵をさずけた。兵を姫路までふんどし一丁の身軽な姿で陸路を走らせるために、親正は兵から取り上げた鎧や兜、鉄砲や火薬、刀・弓矢など大量の貨物と食料・軍資金の搬送を瀬戸内海をつたった船便でやりとげた。

生駒家の家紋は、御所車の車輪を描いた『車紋』である。家紋が表すように、生駒家は、戦場では輸送を得意としていた。

ちなみに、現在の陸上自衛隊員が制服の襟につける職種き章には、輸送科は車輪がデザインされている。また、施設科のデザインは城である。

「もうひとつ、高松の名には意味がございます」親正はつけ加えた

「羽柴秀吉さまの羽柴は、丹羽長秀、柴田勝家からそれぞれ一字をいただいて、運気を味方につけました。高松の高は、官兵衛さまの本名である黒田孝高からいただきました。松は秀吉様の雅号である『松』からちょうだいさせていただきました。豊臣秀吉が死んだあとは黒田官兵衛さまが天下人になってください。策略は千利休さまが担い、わたしは金策で応援します」

その話を聞いて、黒田官兵衛は悪い気はしなかった。3人の力が合わさりあう史上最高の城郭を、生駒親正のために造ってやろうと思った。

屋島山頂に建つ屋島寺の本堂の広間では、生駒親正が黒田官兵衛の基本構想(縄張)した新しい高松城の木製模型をくいいるように見つめていた。官兵衛が親正に設計のプレゼンをはじめた。

「生駒様は豊臣家の金庫番がお役目ですから、城は石蔵のような頑丈な要塞でなければなりません。宣教師の話によるとフランス国の北海には、干潟の上にそびえ建つ石積みでできたモンサンミッシェルとかの頑強な要塞があるそうです。これを真似て弘法大師空海が創建した屋島寺に生駒殿が信仰する不動明王を祭る、海城を造らせてもらいます」

屋島のすぐ東には、最良質の庵治石が採れる五剣山があり、資材に不自由はなかった。屋島は古代から堅牢な海上の山城として使われてきた歴史がある。

西暦663年大陸進出をはかった大和朝廷が朝鮮半島の白村江(はくすきのえ)で大敗退し、唐・新羅軍の報復におびえて、全国6ヶ所に都を死守するための要として築いたのが屋島城であった。京への輸送の大動脈である瀬戸内海の中央にある屋島城は航海する船を監視し、攻撃するには最適の立地にあった。

3年前に黒田官兵衛は、四国を制圧していた長曾我部元親を攻めるため、2万3千人の兵を率いて屋島に本陣を構えたこともあり、讃岐を制するには屋島以外の場所は考えられなかった。黒田官兵衛は姫路城を設計した、天下に聞こえたお城設計の名人である。

屋島に集まったのは官兵衛ばかりではない。秀吉軍団は城造りに際して、織田信長の流れを汲む巨大で美しい城郭を求めたが、さらに工期の短縮にもこだわった。

秀吉が木下藤吉郎時代には、墨俣城を一夜で築き信長を驚かせている。屋島寺も空海が地面に錫杖を突き立て呪文をとこなると、沈みかかる太陽が止まり一日で建ったという逸話がある。

生駒親正築城の手助けには、親族衆ナンバーワンである秀吉の弟・羽柴秀長(48)をはじめとして、のちに肥後藩主になる加藤清正(26)、土佐藩主になる山内一豊、伊予藩主になる加藤嘉明(25)、今治藩主になる藤堂高虎(32)、阿波藩主になる蜂須賀小六などの武将が、総勢10万を越える兵を屋島に集めて日本のモンサンミッシェルを目指して、天主の石垣を積み上げていた。

黒田官兵衛が計画していた工期が、10万人もが突貫工事で臨んでいるにもかかわらず大幅に遅れていた。予定では桜が咲く今ごろまでには、城の骨格は出来上がっていなければならなかった。

屋島の島全体がピンク色に染まった。山桜が満開になったのだ。いつも強気の孝高が、目に涙を浮かべて嘆いた。

「日本人は石で城を築くことができない体質なのか。木で造らせたなら安土城のように世界一巨大で美しい城ができるのに、どうして石ではできないのだ。なさけない」

「官兵衛さんよ。もう石の要塞はあきらめようではないか。日本と南蛮では刃物に対する考えが全く違うと、わたしは思う。削ぎ切るために鍛錬した日本刀の刃先と、叩き割るために重くした南蛮刀の刀身では、加工の相手が違うのもあたりまえだ。日本人が石を組んで巨大な城を造ることは、しょせん無理だったのだ。」

親正は屋島寺本堂の奥に隠れている和尚に、大声で命令した。

「黒田殿にお茶を、いやさ、赤ぶどう酒をついでやってくれ。こんなときは黒田殿が好きなワインとかやらを、飲んで気持ちを入れ替えてから、あらたな縄張りを考えるのが一番じゃ」

和尚が大きな瓶(かめ)を、小坊主らに運ばせてきた。

「去年の秋は屋島では野生の山葡萄が大豊作になりまして、このように見事な赤い般若湯ができました。どうぞいくらでもお飲みくださいませ」

和尚が茶碗を渡そうとするが、官兵衛は断った。

官兵衛は頭にかぶっていた兜をとると、反対に向け両手で支えて、和尚が拵ですくったぶどう酒を受け入れた。

「兜を器にすることは、なんと機能的な使い方でしょう」

和尚は感心した。しかし、戦国武将が戦陣で威風を見せびらかすためには、あまりにも奇抜だった。

黒田官兵衛の兜は『赤漆塗合子形兜』と呼ばれている。武具らしく首を守るシコロは付いているものの、それをはずすと高台付さかずきである。赤い漆塗のどんぶり鉢そのものの形である。

戦場でどんぶり鉢を逆さにかぶった大将を、敵が見たらどう思うだろうか。恐れをなすよりも、むしろ大笑いしてしまうだろう。だが、黒田官兵衛孝高の兜姿は、敵兵に恐れられた。

「不思議そうな顔をしておるのう、和尚。この兜は『聖杯』じゃ。戦場で知らぬ者はおらん」

酒のつまみに用意させた、うどん用の小麦粉を長男の長政に練らせ、丸餅のようにしたものを、官兵衛は火鉢の上であぶり始めた。

「ほれ、こんがり焼きあがった。これはパンじゃ。イエス・キリストの肉体じゃ」

和尚がきょとんとする顔を、面白そうにながめながら、ちぎったパンを口に放り込んだ。

「そして、赤ワインは、キリストの血であるぞ。」

ごくごくとう兜から山ぶどう酒をうまそうにして飲んだ。

「イエス・キリストの血を入れた盃のことを『聖杯』と呼ぶ。よってこの兜は聖杯じゃ。聖杯に入れたワインを飲んだ者は、不死の命を得られるとされているのだ。これはバテレンの教えだから、仏教の和尚にはどうも理解できないだろうな。ハハハ」

和尚をからかって、官兵衛の気分は少し楽になった。

親正のノドがごくりと鳴った。「ワシも酒が飲みたくなったわい。かかあに、酒を用意せよう」

本堂の窓を開けると、離れた庫裏に向かって大声で叫んだ。「おーい。かかあ、聞こえるか。聞こえたら返事をしてくれい」

生駒親正の妻の名は、毬唄である。「おーい、まりあー。聞こえたらさっさと酒を持ってきてくれい」

身だしなみをととのえた、色白の美人熟女が徳利を抱いて本堂に現れた。

「だんなさま、よく聞こえてますよ。あんまりうるそう言わんといて。黒田様が笑ってるじゃありませんか」

官兵衛は毬唄(48)のことが好きになり、いつかはクリシタンにしたいと考えていた。

親正は毬唄から注がれた酒を、高麗井戸とよばれる大き目の茶碗で受けると、官兵衛の兜に突き合わせて乾杯をした。

「うまい。いつ飲んでもほんまにうまい酒じゃ。わしの造った酒は天下一品じゃ」

親正は酒造りにも才能があり、日本一うまい酒を醸造することができた。

秀吉がひとたぶらかしの名人といわれるのは、機会をとらえて親正のうまい酒を飲ませることで、相手を意のままにできたからである。

夜も暮れようとしたとき突然轟音がとどろき、屋島山頂の南北両端に屋根の上のシャチホコのように生えていた大楠に雷が落ちた。雷の火花で2本の大楠は枝葉と表皮が飛び散り、あとには磨いた床柱のような太い幹が、30メートルの高さでそびえ立っていた。クスノキは讃岐を代表する樹木である。大木に育ったクスノキは厳島神社の海鳥居の柱になっている。

香川の県木にはクスノキがふさわしいと誰もが思っていたが、意外にも選定されたのは県木県花ともにオリーブであった。オリーブが選ばれたいきさつは『源内コード』の続編小説『天女と悪龍』であかされます。

風速40km/hの海風が舞吹いて激しい雨になった。春一番の嵐である。屋島に集まった10万の兵たちは、それぞれが地獄の戦場を渡り歩いたつわものたちである。思いおもいに嵐から身を隠す場所を探して激しい風雨をやり過ごしていた。

災難がつづいた。真夜中に地震が起きた。積み上げていた城郭の石が、隙間を漆喰で固めていたにもかかわらず、すべて崩れ落ちた。崩れた石は屋島の山麓で非難していた兵の上に降り注ぎ、多数の犠牲者がでた。

生駒親正は心配になった。この災難はどういうことだろうか。屋島に城を築くことを神仏が嫌っているのだろうか。

「黒田官兵衛殿、城の構造体を石材にするか木材にするかは大切な選択ごとであるが、立地場所選びについても、引田城につづいてもう一度、慎重に神々の声を聞いてから決めたらどうだろうか」

官兵衛も同じ不安な気持ちでいた。「そうしましょう。夜が明けたら、築城場所の見きわめをやりなおしましょう」

雨は猛烈な豪雨に変わり、いつ止むとも知れず降り続いた。三日後の夜明けとともにようやく雨が上がり、人々はメジロのけたたましい鳴き声で起こされた。満開だった桜は一片の花びらも残されておらず、暴風雨になぎ倒された草木が、崩れた石塊にからみついていた。

屋島寺本堂のちぎれかけた雨戸を押し開いて官兵衛の長男、黒田長政が瓦礫がころがる階段の安全を確かめながら下りてきた。

生駒親正は眩しい朝日に目を細めながら、あたりの様子を見て叫んだ。「なんてひどいありさまなんだ。四百年に一度の大災害だ。官兵衛殿よ、早くこちらに来てこのおぞましい景色をごらんなされ」

親正の長男生駒一正に肩をかりて、不自由な右足を引きずりながら黒田孝高官兵衛が本堂から外に出てきた。

阿波と讃岐の国境をなす阿讃山脈に降った豪雨は、春日川と郷東川の激流となり屋島の南すぐ手前まで広がっていた、河口干潟に生えていたアシやハママツナなどの海浜植物のすべてを、削ぎ削るようにして海に流した。



このあたりの広い干潟は正式の地名はなくて、漠然とした「野原」とか「野原の庄」などと呼ばれる、べとべとの山土と海砂でぬかるんだ場所である。干潟周辺の小高い場所では漁業集落や寺院などがちらほら点在していたが、このたびの川の氾濫で、野原の地で暮らしていた人々と建物の全てが、屋島沖の海へと押し流し沈めてしまった。

「むごい。むごすぎる。「野原」にいて、助かった者は誰もいない。これほど大きな自然災害は今まで体験したことがない。これはまさしく神の祟(たた)りじゃ」

官兵衛は、どんぶり鉢兜の高台に貼り付けてあった十字架を引きはがすと、胸に押し当てて祈った。

「ゼウスさま、イエス・キリストさま。お願いでございます。どうか我らをお救いくださいませ。無事に生駒親正殿のお城ができますように、神様のお力をお貸しくくださいませ。ハレルヤ・アーメン」官兵衛は指で額に十字を描いた。

昨年の1587年には秀吉からバテレン追放令が出ると、官兵衛は仏教に戻ったふりをして名前を如水とするが、キリスト教への信仰はシメオンのままで生涯守りつづけた。

黒田官兵衛は5年前に、熱心なキリシタン大名・高山右近に勧められて長男の長政と共にキリスト教・カトリックに入信していた。洗礼名はドン・シメオンと名乗った。官兵衛の印判・花押は聖母マリアをあらわす「丸にクルス紋」の円の回りに **simeon** とローマ字が書きこまれている。

官兵衛がキリスト教徒になったのは、信仰もあつたがヨーロッパの進んだ文明の知識を、宣教師たちから得たかったからである。そして南蛮貿易で火薬の原料・硝石を大量に宣教師のコネで買い付けたかったからである。

2年後には、豊臣秀吉は北条氏がこもる小田原城を落とし、ついに天下統一を成し遂げる。しかし、成り上がりの秀吉ではいつかは滅びる時がくると、どの戦国武将も腹の底では思っていた。

徳川家康(46)の勢力もまだまだで、だれも口には出さないが秀吉が倒れたあとの天下を取るのには、秀吉の軍師である黒田官兵衛に間違いないと予想していた。

その黒田官兵衛が天下取り作戦で、一番頼りにしている人物が生駒親正である。親正は官兵衛と同じく信長から秀吉へと仕えながら、信長・秀吉が所有する莫大な金銀財宝をひそかに管理保管する金庫番に出世したのだった。その役職こそが「中老」職である。

官兵衛の類まれな奇策戦法と、親正の機を得た資金運用があればこそ、信長と秀吉は天下統一を目前にできたのである。

親正は、黒田官兵衛こそが天下人にふさわしいと考えていた。都合のいいことにふたりの嫡男、生駒一正(34)と黒田長政(20)の仲も大変によかった。

屋島に全国の有効戦国大名が大勢の作業兵を連れ、築城の手助けに次々はせ参じたのは、生駒親正の助力で、黒田官兵衛が天下人になる日が近い将来に来ると信じていたからである。

屋島東方向の沖合いに、小豆島から来た大小多数の船が現れた。先頭を進む巨大軍船・安宅船の船首には、首に十字架をかけた小西行長(30)の姿があった。

行長も親正の築城を手伝いに来たのである。行長は1585年(天正13)秀吉から武功の褒美で小豆島を拝領していたが、秀吉に才能を評価され、肥後(熊本)南部の宇土に国替え(移封)されることになった。その移動航海の途中で、讃岐の国を昨年から治めている、生駒親正のもとに立ち寄ったのである。肥後北部には、加藤清正が就くことになっていた。

小西行長が率いる一団は、嵐で崩れた崖をかきわけて登り、なんとか屋島寺本堂にたどり着くことができた。

「生駒殿、そして黒田殿。たいへんな被害にあわれましたな。お気を落とされませんように。われらも精一杯力をつくさせてもらいます」

屋島は小豆島からはっきり見ることができる。石積みで出来かかっていた城が崩れ落ちるのを、小豆島にいた小西行長らは目撃していた。

「かたじけないことです、小西行長殿」親正は行長の配慮に感謝した。

「行長殿は小豆島から南肥後に国替えになったはず。ひとさまの城造りのことよりも、ご自身のことが大事でしょう」

「いいえ。私と一緒に、肥後の北に移される加藤清正公が屋島に来ていと聞いては、素通りして九州に行くことはかないません。どうぞ私にも、お手伝いさせてください」

黒田官兵衛が照れくさそうに、小さな声でつぶやいた。

「もう大変なことになった。私が秀吉様の顔色を見て、キリスト教をやめたふりをしたものだから、ゼウスさまの怒りを買ったみたいです。小西行長殿や、そちらの高山右近殿のように、きっぱりイエス・キリストを信じておればよかったと、悔やんでいるところです。おふたりには私以上に南蛮の知識をもっておられるから、画期的な築城構想がありましたら教えてください」

高山右近(37)は高槻城の城主であったが、秀吉から城を取るかキリスト教を取るかの、二つに一つを迫られて、大名を捨てて、キリスト教を選んだ筋金入りのキリシタンである。

小西行長は、浪人になった高山右近と、右近と行動をともにする多くのキリスト教信者をかくまっていた。

その中にイタリア人宣教師オルガンチーノ(58)がいて、親正に流ちょうな日本語で話しかけた。

「瀬戸内海は美しくエーゲ海のようなようです。小豆島は世界で一番天国に近い奇跡の島です。島の形が、瀬戸の海にさまよえる羊の形をしています。羊はイエス・キリストが姿を変えたものです。小西行長様が島のほとんどの神社仏閣をキリスト教会・南蛮寺に改宗させていただきました。その南蛮寺の玄関にオリーブの苗木を植えたのですが、全部育ちました。これはもう奇跡です。京都と大阪の南蛮寺にもオリーブを植えたのですが、どれも育ちませんでした。ルイス・フロイスらの宣教師も日本全国でオリーブの苗木を植えたのです」

がだめでした。育ったのは小豆島だけでした」

屋島を押し流さんとするほどの、激流が渦巻く河口付近を眺めていたオルガンチーノが、西の海を指さして叫んだ。

「あれを見なさい。この山と西向こうの山との間で、海の上に光っている沖の州が、皆さんには見えますか。あの輝く場所が日本の聖地です。神が宿り来る聖地です。あの場所を城の中心にして城塞を築けば、これからの日本はすべてがうまくいくことでしょう」

オルガンチーノはイエズス会の宣教師として、ルイス・フロイス(56)と日本で布教活動をしていた。織田信長の信頼を得て「うるがん伴天連さま」と敬愛され、高山右近の絶大な協力で、京にキリスト教会『南蛮寺』と司祭養成学校『セナリヨ』を完成させた頃には、身分の差なく数万人をキリスト教信者にしていった。

しかし、本能寺で明智光秀に信長が殺されたあと、次に権力者になった秀吉も、しばらくはオルガンチーノに優しくしてくれていたが、秀吉のバテレン追放令が発せられると、高山右近とともに迫害されるようになり、小豆島領主となった小西行長にかくまわれていたのである。小西行長も熱心なキリシタン大名であるが、秀吉の信頼が厚く、信仰を目こぼしされていた。

ところで、小豆島という島の名は何に由来するのだろうか。

瀬戸内海には3千もの島があり、小豆島は淡路島に次ぐ大きな島である。アズキを特産品にしている気配はないし、霊島にふさわしく瀬戸内海の島では最も高い山(817m)に渓谷がからみ合う、景勝・寒霞溪(かんかけい)がある。小の島よりも、大の島と名づけるべきかも知れない。

小豆島の小豆をカタカナ表記すると「セウヅ」となる。つまりゼウスの島という意味である。ギリシヤ神話から始まる最高の神ゼウス、神々の神「ゼウス」を漢字に起こしたのが「小豆」ではないだろうか。

小豆島は江戸時代(1603～1867)には徳川将軍が治める天領であったが、廃藩置県で讃岐の国が香川県に代わるとき、香川県に吸収されたのだった。

香川県が認定するシンボルマークのうち、魚はハマチである。日本で最初の養殖漁業に成功した魚が安戸池のハマチであったからである。県木はオリーブである。なぜか県花も地味なオリーブの花である。

ヨーロッパではオリーブは神木・命の木として広く愛されているが、日本ではあまり馴染みのない樹である。県木・県花の両方をオリーブに制定している香川県でも、小豆島以外の地区ではめったに見かけることがない樹木である。県のシンボルとするからには、それなりの重大な暗号が「オリーブ」にこめられている。

2008年、小豆島とエーゲ海・ミロのビーナスが発見されたミロス島とは姉妹島の縁組をした。小豆島側の初代大使はマラソンの松野明美さんが就任した。祝い事にはオリ

ブの枝で編んだ冠が登場する。

高山右近とオルガンチーノ、そして小西行長と黒田官兵衛が、これから築く高松城について激論を交わしていた。築城見習いの藤堂高虎は横で聞いていた。生駒親正は彼らと少し離れた場所で休んでいた。

そのとき、美しい巫女(みこ)が現れた。

「遅れて参上し、申し訳ありません。生駒様はどちらにおわせますか。いましがた陰陽道で導かれた、お城を建てる最適地のお告げがありましたのでその場所をお知らせに参りました」

「ようこそ、カムロ神社の美人巫女殿。そなたが来るのを今か今かと待っておったのじゃ。高松城にふさわしい場所の神からのお告げを、どうぞ親正にお示しください」

促されて、巫女が指さした場所は、なんと、オルガンチーノが示した所と同じ沖の洲の場所であった。

親正は驚いた。これは八百万(やおよろず)の神仏による導きであり、絶対に逆らってはいけない、築城の決定場所だと理解した。

それぞれの意見をまとめていた黒田孝官兵衛の顔色が晴れた。官兵衛には海上に浮かぶ高松城が完成したときの姿が見えたのだった。

「発想の転換をしましょう。高松城は戦争をする城である必要はない。海上交易で栄える城都であるべきだ」

オルガンチーノが官兵衛の話に割り込んだ。

「私はベネチアから来ました。ベネチアはヨーロッパの中で一番栄えている都市です。聖地イスラエルをイスラムから奪還するために戦争をしている、十字軍が寄港する軍港としてもうけているのです。日本はまもなく秀吉の天下統一によって、国内は戦争の無い平和な国になるでしょう。しかし、秀吉の野望は織田信長の意志を継いで、朝鮮明国を相手に戦争をしかけるでしょう。そのとき生駒親正さまの時代が来ます。瀬戸内海の軍港の拠点となって利益を得る、日本のベネチアをお造りなさいませ」

黒田官兵衛が元気な声で親正を促した。「屋島と五色台にはさまれた湾の中に、豆粒のような大きさに突き出た砂洲の上に、南蛮天主を建てましょう。天主に祭る神はマリアさまです」

「なんじゃと。わしのかかあを天守で祭るじゃと」

「毬罫様のことではございません。聖母マリアさまのことです」

小西行長も親正に頼んだ。

「私の領地である小豆島では既存の神社仏閣をカトリックの教会・南蛮寺に建て替えさせ、大勢の島民をキリシタンにしてきました。抵抗する寺は焼き払ったりもしましたが、生駒親正様が信仰する不動明王を本尊にする寺だけは、手をつけずにいました。どうぞ行長を

評価していただき、天主に聖母マリアさまを祭りくださいませ」

キリシタン大名一同がそろって親正に、南蛮天主の建設を願って頭を下げた。

どこにいたのか、生駒親正の正妻・毬重が皆の前に出てきて優しい声で言った。

「わたしも、みなさまのお考えを支持します。高松の中心は、聖母マリアの天主閣から始めましょう。そして八百万の神々と親正さまが信じる不動明王に守られた、海運で繁盛する高松を皆さまの力で築いてくださいませ」

南蛮天主建設の話聞きつけた10万の兵士たちは、これまで見たこともない海城を造れることに喜びの声があがった。だれもがキリスト教に興味をもっていたのである。

親正らは屋島を降りると、瀬戸内海に浮かぶ海上都市・日本のベネチアを造るために濁流がうずまく郷東川(ごうとうがわ)河口の砂洲に舟で向かった。

#### 14. 絵から消えた十字架

滝上正江が屋島ケーブルカー山頂駅跡を改築した隠れ家『みさご館』の応接間には、日本人で初めて描いた平賀源内の油絵「西洋婦人図」のレプリカが壁に飾られていた。

香西しおりはこの絵画のうっすらと微笑んだモデルを、どこかで見たような気がして正江にたずねた。「この夫人画とよく似た絵を、どこかで見たような気がして落ち着かないの。どこで見たのかしら」

「しおりちゃんは、ヨーロッパが長かったのよね。それじゃあ、フランス・パリには行ったことがあるかしら。ルーブル美術館にある、世界で一番有名な絵を思い出してごらんさい」正江が質問した。

しおりはハッとした。「そうだわ。モナリザね。でも、どうして平賀源内は鎖国の日本で、モナリザのような西洋夫人をモデルにした油絵が描けたのかしら」

しおりがドイツ・ドレスデンでバレエを学んでいた頃、たまに暇な時間ができるとうと食欲に周辺各国の美術館や博物館を巡った。ヨーロッパ諸国の徹底した、古い文化を大切にす精神をうらやましく思っていた。もちろんルーブル美術館へも何度も出かけて、歴史文化の感動を深く得ていた。

しおりは携帯をひらいて、まわりの人に見せた。「わたしの待ちうけ画面はモナリザよ。ルーブル美術館で本物を写したのよ」

足立もガラケー携帯をとり出し、画像ファイルを開いて見せた。

「商店街の再開発の参考にするためにパリを視察したとき、ルーブル美術館で撮ったのがこの写真です。『モナリザ』の横で一緒に写真に納まることができたのは、今でも信じられないことです」画面には微笑むモナリザの横でピースする、足立のにやけた顔が映っていた。

画面をのぞきこんだ多賀路雄が仰天した。「ルーブル美術館では、本物のモナリザにフラ

ッシュを当てて写真を撮ってもいいのか。ヨーロッパと日本では美術に対する考え方がずいぶん違うものだな。俺が高松市美術館で鑑賞していたとき、フリースペースのエントランスに置いた金属製小物作品を、何気なくデジカメ撮影しただけで警備員にもものすごく怒られたりしたもんだ」

滝上正江は、平賀源内の残した作品や資料を『みさご館』にたくさん蒐集していた。

「源内は絵を描いたり、自然観察をしたり、いろいろな面白いものを発明して日本のダ・ヴィンチと呼ばれているわ。そうよ、源内はダ・ヴィンチになろうと努力していたのよ」

本棚から1冊の肉厚本をとりだすと、一枚板の広いテーブルの上で「西洋婦人図」の絵が載ったページを開いた。この本は数年前に、全国各地の博物館で催された「平賀源内展」で販売された豪華な資料本である。

「ダ・ヴィンチは、モデルのジョコンド婦人を目の前にして『モナリザ』の油絵を描いたわ。でも源内は、オランダ船貿易で持ち込まれた、ふたりの南蛮紳士淑女を描いた「Gaseo」と署名された油絵から模写したのよ。

源内は日本で初めての油絵を描くにのぞんで、この『西洋男女図』から、なぜかモナリザに似た淑女だけを描き写しているわ」

本には、源内作『西洋婦人図』と、年恰好がそっくりな婦人が『西洋男女図』に描かれている絵が載っていた。

「わたしは推理したのよ。源内はダ・ヴィンチが残した暗号。つまり、モナリザをそっくり真似た油絵を描くことで、ダ・ヴィンチが残した暗号の継承者は、平賀源内であることを伝えようとしたのではないかしら。源内はダ・ヴィンチが残した暗号をすべて解き明かし、その暗号を源内流にわたしたちに伝えようとしたのが、この『西洋婦人図』だと思うわ」

2つの絵のサイズはダ・ヴィンチのモナリザが73 x 53 cm。対して源内の西洋婦人図は41 x 30 cm。比率はどちらも1.7で、黄金比1.618に限りなく近い。どちらも口元が微笑み、視線の向きは同じ右に向けている。

「源内は油絵を描いたとき、すでにダ・ヴィンチの暗号を解いていたことは間違いないわ。ダ・ヴィンチの文章は鏡で映して、反対文字を使って書いているわ。源内は模写した婦人の向きを、鏡に映したように反転させて描いているわ。そして元絵に描かれていた、婦人が胸元に飾った十字架を、源内はあえて消し去っているでしょう。これが源内の暗号。つまり源内・コードなのよ」

正江の語気があがった。「源内がわたしたちに残した暗号は、消された十字架が解き明かしてくれるのだわ」

正江は「西洋男女図」の、婦人の胸元にニワトリの玉子大で描かれた十字架飾りを、意味ありげに指先でなぞった。

多賀路雄が滝上正江にたずねた。「平賀源内のことをずいぶん研究したみたいだね。なぜ、

それほど源内に入れ込むようになったのだね」

もう1本ワインのコルクを抜いた正江は、みんなのグラスにつぎたした。

「多賀先生の心臓は落ち着いたようですね。もう少しのワインなら大丈夫そうですね。どうぞ召し上がってください」

ほんとうに少しだけを、正江は多賀のグラスに注いだ。

「わたしが源内に興味を持ったのは、讃岐が生んだ天才だからというだけではないわ。10年前に女性ではめずらしい一級建築士試験に合格して、郷土の都市開発にかかわり始めたとき、あらゆる分野で才能を発揮した源内でも、ただひとつやり残したことがあったのではないかと気づいたからなの。それは建築よ。ダ・ヴィンチは都市開発や建物設計にも挑戦しているわ。もしも源内が建築をしていたら、どんな作品を残していたのか。わたしは源内の気持ちになって、建築設計をしていこうと決意したのよ」

多賀は教え子の正江の成長に感心しながら、ことばを付け加えた。

「源内自身の肖像画を見て、なにか気づくことがないか。ちょんまげが変だとは思わないか。おでこを剃ってまげを結うのが当たり前の時代に、不自然だとは思わないかね」

「多賀先生にあらためて聞かれると、たしかに源内の奇妙なちょんまげには訳がありそうね」正江が首をかしげた。

「俺の推理によると、平賀源内は隠れキリシタンだったからだよ」多賀の意外な話に、皆が驚いた。

「源内は平家埋蔵金を発見してからというもの、各地に伝わる埋蔵金伝説にとりつかれて、全国を旅しているが、留守にした志度の実家にはたびたび幕府隠密がきて、宗門あらためが行われている。田沼意次をうしろだてにして活躍する源内は、ご禁制のキリスト教信者と疑われていたのだ。

だが、ばれなかった。それは源内が、十字架や聖者を描いたイコンなど異教と疑われる物品を決して身に着けなかったからだ。『西洋美人画』を描くときも、十字架を消すほどの慎重さだったように」

源内は生涯を埋蔵金探しに熱中した。とくべつ東北地方では、めぼしいと思われる山麓を掘りまくっている。

秋田・八島藩を訪ねたことで、源内は大発見のヒントを得る。マグラダのマリアの棺を見つけることになるのだった。

八島藩は、高松藩から転封(国替え)になった生駒親正の子孫が代々藩主を務めていた。源内は生駒親正が秀吉から預かった財宝を隠した場所を、田沼意次の口利きがあったおかげで源内は、八島藩主の蔵から生駒親正の秘蔵書を見つけだし、宝物の隠し場所を解読することに成功した。

八島を離れた源内はその足で、青森・新郷村から十和田湖の周辺を調査に向かっている。新郷村は今では、キリストの墓とピラミッドがあることで世界に知られている。

しおりが、みな疑問を代表するようにたずねた。

「ではなぜ、源内が隠れキリシタンだと、多賀先生は言われるのですか」

多賀は確信をもって答えた。

「武士の成人なら必ず守らなければならない身だしなみが、源内にはできなかった。さかやきの剃りこんだ額に、熱心なキリスト教徒だった源内は、十字架を焼き火箸で彫っていたのだ。丸の中に十字架を描いた、焼き傷を前髪で隠すために結った髪型が、源内肖像画で見る変わったちょんまげだ」

4人ともワインでほどよい酔いがまわり、顔が赤くなっていた。

滝上正江は桐箱からなにやら掛け軸を出し、壁面に吊るした。平賀源内が12歳のとき製作した『お神酒天神』と呼ばれる絵が描かれた掛け軸である。このからくりを施した掛け軸が評判になったことから、平賀源内の天才ぶりが世間に知られるようになった、記念すべき一品である。

お神酒天神のからくりを知らないのは、しおりだけだった。正江はしおりにワインを勧めた。

「もう飲めません。わたし、顔がこんなにまっかっかになっちゃいました。」

そのとき突然『お神酒天神』の顔が血で染まったように、真っ赤に変わった。びっくりしたしおりが、グラスを床に落として、割れたガラスが飛び散った。

お神酒天神の赤い顔が、高松市美術館館長木目の死に顔と重なり、4人の表情がこわばった。

「冗談はやめてください、正江さん」

酔いの席でからくりが受けると思い、正江は掛け軸の裏に仕掛けた赤い布を、天神さんの顔に重ねて酔っ払い顔にしたのだが、みんなの反応はジョークを通じない意外なものであった。

## 15.海上都市・高松城

屋島は1185年2月、源平合戦の戦場になった。紅布を旗印にした安徳天皇を奉じた平家軍が、屋島に都を移して拠点を構えたが、追ってきた白布を旗印にした源氏軍に負けたいわくある島である。

さらに、大和朝廷が667年屋島山上に築いた白村江敗戦対策に備えた山城も、出番が無いまま朽ち果てていた。

生駒親正は思った。武士が讃岐を華やかに治める中心の地は、天皇家の負の歴史がある屋島ではないと。

では、城を築く場所はどこなのだ。それを教えてくれたのが、小西行長、高山右近らと一緒に小豆島から船で来たイエズス会宣教師ニエッキ・ソルド・オルガンチーノである。その場所は、讃岐国の陰陽道をあやつるカムロ巫女(みこ)の占いとも一致していた。



高松と命名された城が築かれた場所は、瀬戸内海の海の中に、イタリア・ベネチア都市のように造られた。

オルガンチーノが予想したとおり、豊臣秀吉は日本を完全支配し、国内では戦闘は消えた。そして、秀吉はアジアを支配しようと手はじめに朝鮮に奇襲攻撃をした。

朝鮮出兵の先鋒大将は文官派の小西行長と武官派加藤清正であったが、生駒親正も1592年からの文禄の役では資材運搬の裏方仕事を兼ねながら戦い富を増やしていった。

高松城は戦国の城郭では考えられないほど、攻撃への防御対策が貧弱である。海上から立ち上げた石垣は、ようやく人の頭ほどの高さである。

海上に突き出した水城は全国にいくつもあるが、敵が軍船で城に横付けして攻撃してきても、石垣の上に兵が飛び移れないように、そうとう高くするのが常である。

高松城の石垣は、小さな漁船からでも侵入を許してしまう低さである。その代わり、石垣で減らした築城予算を、港の整備の強化と秘密の脱出トンネルの掘削に使った。

城に直接大型船が接岸でき、荷物の移動がスムーズに出来るように、城内の高低差を無くし高松城はベネチアを真似た、1万人が住む交易の海上都市として繁栄した。

## 16. 平家埋蔵金の発見

多賀路雄は高校教員時代には歴史社会を教えていて、定年退職後はボランティアで観光ガイドをすることもあった。

得意としたのは「源平屋島の合戦」の舞台の現地案内で、那須与一が扇の的を射抜くさわりを、歴史に興味のある観光客を前にして、多賀流の解釈で、あることないことを面白おかしく話すことであった。

滝上正江は恩師・多賀先生の講義を受けたのをきっかけに、平賀源内(1728～1779)に興味をもつようになった。

「おうた子に教えられということわざがあるが、源内について俺よりもはるかに、正江のほうが研究を深めたことだろう。足軽の給料暮らしの源内が全国を長く旅行したり、高額な洋書を買ったり、エレキテルなどの発明品をいくつも作れたのが不思議だったが、どこから資金を得たのだろうか。正江には、源内のお金の出所が分かったかな」

正江にも、貧困の源内が突然、金遣いが荒くなった理由はわからなかった。

しかし、うどん屋の足立には思い当たることがあった。

「カヌーに初めて乗ったのですが、慣れない乗物に、船酔いしてしまいました。屋島の合戦で現時に敗れた平家は、船に乗って壇ノ浦に逃げようとしたでしょうが、季節は冬・2月です。北風で波は荒れ、船になれない船酔いした家臣や女官は、航海逃避行に耐えられずに船を降りたはずです。別れ際には、軍資金である金塊や砂金の分配を大量に受け、担いで逃げたはずです。逃げて走れる場所は屋島のあたりでは、春日川の河川敷沿いだけしかありません。そのほかは藪が茂り、進めなかったでしょう。春日川の上流の先には、か

づら橋で有名な落人村にたどり着きます」

足立は正江から地図を借りると、屋島の真南にある徳島・祖谷村を示した。

「しかし、船酔いで足のもつれた平家落人衆には、重い黄金を担いでの逃避行は無理でしょう。追っ手は源義経や弁慶ら、つわもの揃いですから。」

足立の話は、多賀の解説よりも納得させるものがあった。

「おうた子に教えられとは、足立にもいえるな」

多賀は、ふたりの教え子が歴史に興味をもってきてることに感動した。

「そこで平家落人は、重い黄金を春日川の河口に埋めて隠し、とりあえず追っ手からのがれて、源氏が去ったあとで取りもどしにくることにしたと思う」

多賀は足立の推理に感心して、うなずいた。

「だが、足立よ。落人が黄金で贅沢な暮らしをしたという形跡はないぞ」

「当時の日本は『黄金の国・ジパング』とマルコポーロが紹介したほどの世界一の黄金産出国でした。安徳天皇を擁する平家は想像を絶する量の黄金を、屋島に建てた天皇宮に運び込んでいたでしょう。平家落人は落人狩りが終わった頃、春日川河口に戻ったものの、長年の川の氾濫で土砂が積もり、埋蔵した場所を特定できず取り戻すことができなかったと思います。」

足立の推理を受けて、平賀源内を研究していた正江はひらめいた。

「22歳で高松藩の足軽役人になった源内は、27歳から突然金づかいが荒くなるのよ。高額な南蛮書を大量に買ったり、多額の開発費をかけて測量万歩計「量程器」などの精密機器をつぎつぎと発明製作しているわ。高松藩勤めを突然退職してしまうのよ。退職したら収入が全く無くなるのよ。それでも長崎、江戸、天草、秋田、秩父など全国各地を巡りつつ、燃えない布「火浣布」を発明したり世界地図を描いた陶器「源内焼」を量産するなど、多額の資本を使った事業をつぎつぎに起業するのよ。特に力を入れたのは鉱山開発で、一獲千金をねらい全国の山麓を掘りまくっているわ。あげくには徳川幕府の重鎮である・筆頭老中の田沼意次(1719～88)にたいそうひいきにされているわ。賄賂政治家で悪名高い田沼意次にかわいがってもらうには、どれほどの賄賂を源内は袖の下で払ったのかしら。それらのお金の出どころが、春日川河口に隠された平家埋蔵金を源内が見つけていたとしたら、すべてが説明できるわ」

正江は、ひとりよがりの推理に満足した。

「納得いく推理でしょう。逃げ延びた平家落人は、しばらく経って落人狩りが納まった頃に、春日川河口干潟に戻り、隠しておいた埋蔵金を必死になって探したものの、合戦から何年も経った春日川河口干潟の地形はたびたびの川の氾濫で大きく変わっていて、見つけ出すことが出来なかったのよ」

義経、埋蔵金、平賀源内・・・と耳にしたことがある話が、身近な屋島の周りであったことに香西しおりは驚いた。身近な所で歴史に残る大きな出来事があったことを知り、し

おりはますます郷土史が好きになってきた。

多賀にもひらめくものがあった

「源義経も屋島に来てから、突然大金持ちになっていたようだ。神戸・一の谷の合戦で義経が『鹿も4足なら馬も4足だぞ。われにつづけ』と叫んでヒヨドリの絶壁を駆け下りて勝利した勢いに乗って本州から屋島まで平家軍を追うときには、たった5隻の船で渡ってきたのに、屋島の合戦でふたたび勝利し下関・壇の浦へ平家を追跡するときには軍船は800隻にまで増えている。船ばかりではなく将兵までも増やして味方につけるには、かなりな金銀を振舞わなければならなかったはずだ。義経が春日川河口干潟の平家埋蔵金を発見していたとしたら、説明は成り立つ」

長年の疑問が解けたと言わんばかりに、多賀は満足そうな表情をした。

## 17. 亀甲船と安宅船

1597年、2度目の朝鮮出兵が始まった。慶長の役である。

生駒家は朝鮮軍と直接戦いを交えることはなかったが、物資の輸送役を担当し、戦闘では重要な後方支援をになっていた。

高松城は瀬戸内海に浮かぶ、海上交易都市として、船舶の中継基地として大いに機能した。

かつて屋島に城を築こうとしたときに、建築資材を運び込むため、屋島と四国本島の間を埋め立てていた。そのため、屋島と五色台で囲まれた湾の沖に海上都市・高松城を建設したが、そこは二つの暴れ川の河口であった。

阿讃山脈を源流とし、大雨が降ると真砂土(まさど)と呼ばれる花崗岩が風化した黄色い大量の、北の瀬戸内海に向かって古川(のちの春日川)と郷東川が運んでいた。

2本の川の河口をふさぐように、高松城郭が造られたため、真砂土は高松城の南に築かれた石垣にせき止められ、わずか10年足らずの間に、高松城は盛りあがった土で四国本島とつながってしまっていた。

生駒親正は、城の南に盛り上がり広がったデルタ平地を、城下町にして町人を住まわせようと考えた。商業でにぎわう城下町を造り、高松をさらに発展さそうと思った。

街づくりにのぞんで縁起を占うため、安倍清明誕生の噂がある、カムロ神社(現かんえい神社)の巫女をふたたび呼び寄せて、陰陽道で守られた街構想を企画させようとした。

鐘や太鼓でにぎやかな伊勢音頭を奏でながら、夫婦獅子が踊っていた。獅子頭だけで200kg、胴体長が20寸もある巨大な舞獅子を、60人がかりで抱えて練り躍る中で、巫女は陰陽五行の天の声を聞き、高松城城下にこれから造る城下町の吉相を占った。

「まずは武士が住む城と町人が住む城下町を仕切るために、外堀をめぐらしなさい。そして、外堀に渡した「常磐橋」と名づけた橋で城内と城下を行き来させ、橋の真南に向けて

幅60m、長さ300mの区画に道を挟んで100軒の商店を並べなさい。商店街は塀で囲み、夜間は閉じて日中のみの時間内で、高松城に住む武士と、城下に住む町人・百姓とが交流できる経済特区にきなさい」

巫女は、高松城の外側にも城の力が及ぶ地先の町人街を造れと言っているのだ。

なるほどと、親正は巫女のお告げに感心した。

「あいわかった。高松城から南に向かって一直線に延びる城下町を、息子の一正に造らせることにしよう」

海上沖を見張りしていた、月見櫓の番人が吹くほら貝がけたたましく鳴った。高松城に異様な船が近づいてきたぞという警報である。

朝鮮出兵をしていた小西行長を乗せた船が、戦いを離れて、こっそり日本に戻ってきたのだ。

これまで見たことも無い異様な船で、大きな亀の形をした鉄甲軍艦3隻である。朝鮮海軍の名将・李舜臣(イ・スンシン1545～98)が率いて秀吉軍を困らせた高性能の戦艦を、行長が奪い取ってきたのだ。あとに続いて、九鬼嘉隆(58)も3隻の鉄甲安宅船をひきいてやってきた。

高松城の正面玄関・水手御門から入城した小西行長は疲れきっていた。

「今度の戦いは劣勢ですぞ。親正殿は出兵されなくて正解でした。朝鮮イ・スンシン武将はこれまでで最強の相手です。九鬼殿が送り込んだ六隻の信長様ゆずりの鉄甲船のうち、三隻を奪われてしまいました。こちらも負けまいとなんとか、敵の亀甲船3隻を奪うことができましたので、親正様に預かってくださいませ」

生駒親子も5年前の文禄の役では朝鮮に出兵して交戦し、亀甲船の優れた戦闘能力に散々な目に合わされ、『恐るべし亀甲船』と、おびえながらも、優れた亀甲船に敬意を払っていた。

朝鮮軍船・亀甲船(きっこうせん)は亀の甲羅形をした軍艦で、全長およそ40<sup>間</sup>、幅が15<sup>間</sup>もあり、船上甲板すべてに、生け花で用いる剣山のように、槍・剣が突き立ててあり、亀甲船に乗り移ろうとする特攻兵を、串刺しにする仕掛けになっている。

船側からは多数の大砲が発射できるようになっている。船底は丸まっていて、直進性と回転性にきわめて優れている。最大の攻撃は体当たりで、亀のような頑丈な船体を敵船の横っ腹にぶっつけて、船倉に穴をあけて沈めてしまう戦法を得意としていた。

一方の日本軍船・安宅船(あたけぶね)は、亀甲船と同じように巨大な軍船であるが、船の高さが3倍もある。大砲で攻撃したのち、敵船に横付けをして、上から鉄砲や弓矢を放ち、弱った敵船に兵が飛び移り、刀を振りかざして切り込むという戦法を得意としていた。

安宅船から亀甲船に飛び移った兵は、甲板に草木でカムフラージュされた剣山で串刺しにされ、手出しができずに戸惑っているところを、亀甲船が安宅船に体当たり攻撃をかけられて、秀吉軍は惨敗していた。

生駒親正は小西行長の労をねぎらった。

「よくぞ無敵の亀甲船を捕獲された。さすがは行長殿じゃ。あっぱれ」

戦闘でほころびた鎧をさすりながら行長が疲れた声でわびた。

「生駒殿からお預かりした軍資金を奪われました。金銀財宝を船底に満杯詰め込んだ鉄甲安宅船3隻を、李舜臣に奪われてしまいました。まことに申し訳ないことをいたしました」

「行長殿よ、勝負は五分五分。お互い、3隻を交換したということにしようか。まあ、愚痴でもしかたがない。行長殿も九鬼殿も、さぞかし疲れたでしょう。高松城でしばらく休まれて、腰の強いうまいうどんでも味わってください」

「いやいや、ゆっくりと休んでもいられません。我が軍の戦況の悪化を秀吉様にお伝えして、一刻も早い朝鮮からの撤兵を、お願いに行きます」

親正が用意した高速帆船に乗り換えたふたりは、早々に秀吉のいる大阪へと出航していった。

小西行長と九鬼嘉隆を着見櫓の展望階から見送った親正は、金銀財宝を満杯にした6隻の巨大軍艦を、どこに隠そうかと頭を悩ませた。

親正は一正に、船の隠し場所も任せてみようと考えた。

「のう、一正よ。お前ならこの6隻の宝船をどこに隠すかのう」

「父上。私によい考えがあります。高松城を築く前に、讃岐の中心地を決める候補地のひとつに引田とともにあがっていた宇多津の、その近くに亀山という標高66呎の瀬戸内海に面した小さな山がありますが、そこに新しく城を築きたいと思います」

「一正よ、それがいい。日本一高くて美しい石垣を築いてみよ」

秀吉の伴天連追放令により、キリシタンは隠れて暮らしていたが、広島、倉敷、讃岐には、隠れキリシタンの人口が目立って多かった。

生駒親正と一正は隠れキリシタンに優しかった。隠れキリシタン探しの追っ手を乗せた船を、いち早く見つけてキリシタンを逃がすために、見晴らしのよい亀山に見張り用の城が必要だった。

亀山の北に広がる瀬戸内海の沖には、中程度の大きさの「さぬき広島」と「本島」があり、その間に知られざる大地が隠されていた。彼岸の大潮の干潮時間にだけ水面上に現れる、広大な沖の洲『園の洲』が、亀山の山頂から監視できるのであった。

地元の漁師は、園の洲に海水がかぶっている時間に船できて干潮時間を待ち、潮が引くと干潟に取り残された船から降りて潮干狩りでアサリを採っていた。潮が満ちると、船は干潟から浮き上がり、園の洲から離れることができた。

親正はひらめいた。6隻の亀甲船と鉄甲安宅船を亀山沖に集めて、園の洲が干上がって現れたときに、すばやく地下進入井戸を掘り、瀬戸内海の海底深くの岩盤に巨大な洞窟を造れば、船は隠せるはずであると。

「跡継ぎ息子の一正よ。亀山に造る城の名前は、なんと名づけるのだ」

「えっ。私に命名させてもらえるのですか。父上さま、ありがとうございます。それでは、亀甲船の比類まれな強力にあやかり、『丸亀城』といたしとうございます」

「それはよい命名である。この機会に強い亀さんにあやかっ、生駒家の家紋に3つの亀甲をあしらった家紋を加えよう」としよう」

こうして丸亀城は慶長二年(1597)、一正の居城として着工した。そして生駒家には御所車紋のほかに、もうひとつの家紋『三つ合わせ亀甲紋』が加わった。

丸亀城の本丸にある天主閣は物見台程度の小規模な建物であったが、三重三段に積み上げられた石垣は高さが60尺を越え、日本一を誇った。石塊の接合面は一個いっこが平たく削りだされていて、まるでモンサン・ミッセルを真似て失敗した屋島での雪辱を晴らすかのような、美しい扇の勾配を見せた平山城であった。

二の丸には底が見えないほど日本一深い井戸が掘られている。井戸の底にはいくつもの横穴が隠されていて、瀬戸内海に網の目のように張り巡らされた海底トンネルにつづいていと噂されている。城は1602年に完成するが、石垣と井戸を設計施工した石工棟梁は、まるで秘密口封じのように二の丸井戸で謎の死をとげている。

生駒親正には思うところがあった。豊臣秀吉の歳は親正よりも10歳は若いとはいえ、すでに60になり心身の衰えが激しくなっていた。秀吉が亡くなれば天下は再び戦国時代にもどり、徳川家康派と石田三成派が東西に分かれて、決着のつかない戦闘が長くつづくであろうと予想していた。

東西両派が戦いで疲弊した隙をついて、天才軍師・黒田官兵衛孝高が秀吉に代わり天下を取るだろう、と親正は確信していた。

6隻に積んだ金銀財宝は黒田官兵衛を天下人にする資金に使おうと、親正は決めた。そのためには、官兵衛が決起する日が来るまで、だれにも見つからない場所に、宝船を隠しておかなければならなかった。

高松城に外堀をめぐらし、城の南に延びる町人町を造るため、縁起の良い名前を考えていた親正は、亀甲船からヒントを得た。

「町人町は城の一部とするので、城丸の丸と、亀を併せて『丸亀町』と決めることにする」

親正は名前を決めると、大役を終えたような安堵の気分になって、そばにいた長男の一正に告げた。

「わしの歳は71にもなった。まだまだ気持ちは若い、一正よ。お前も43になるし、孫の正俊ですら22歳の男盛りになっておる。これから興す丸亀町は一正に任すことにする。新しく街を区画する町割り、よい考えがあれば申してみよ」

一正は、父親がようやく一人前の跡継ぎ息子と認めてくれたことに感謝した。ぜひとも親正の期待に応えたかった。

「父上、高松の街づくりはこの一正にすべてお任せください。町割りは黒田孝高殿とカムロ神社の巫女からいろいろ教わっております。領民が繁栄する住みやすい高松城下を、まずは丸亀町の街並みから設計してみます」

一正は、以前から町割りをやりたいと、うずうずしていた。

「父上が決断された高松城の位置決めは、四神相応の占いからしても、最高の場所でした。東の『青龍』にあるべき流水には春日川があります。南の『朱雀』の窪地の場所には仏生山下にクレーターがあります。西の『白虎』の大道には金毘羅海道があてはまります。そして、北の玄武には丘陵が広がっています。高松は四方が理想のご神体で囲まれています」

「城の北には瀬戸の海が広がり、丘陵などはどこにも無いではないか」

親正には玄武の丘陵が理解できなかった。

「父上。瀬戸内海はすべて高松城の外堀です。外堀の北には本州があり、中国山地の丘陵がどっしりと横たわり、高松を守護しています」

「なるほど。一正の言うとおりにじゃ。高松城下の町割りをすることは、陰陽風水に守られた理想の郷を造ることでもあるのだな」

一正は地面に竹の先で、高松城と周辺の地図を描いた。

「家を建てるときに最も注意しなければならないことがあります。陰陽道でいうところの鬼門、すなわち北東方向の守りを固くせよと厳しく教えています。丸亀町の鬼門を守るために、『聖杯』を配置しましょう。『聖杯』設置は黒田官兵衛殿のご指導によるものです」

聖杯と聞いて、親正は驚いた。秀吉は昨年(1596年)キリスト教信仰を理由に、国内で初めて、キリシタン26名を十字架で処刑したばかりであった。それでバチが当たったどうかは分からないが、秀吉の人生ピークのこの年には大地震があり、秀吉が巨万の富をつぎ込み精魂込めて建てた方広寺が史上最大鑄造大仏とともに崩壊した。この大地震では讃岐でも五剣山のうち一剣の峰が崩落している。

「父上が建てた高松城天主は、聖母マリアを祭る礼拝堂ですが、ご神体の聖石を隠しておかないと、突然キリスト教やバテレンを嫌うようになった、いまの秀吉様に感づかれたら、えらいことになりますよ」

高松城の本丸は城内の中心にあり、海水を引き込んだ内堀により孤立している。二の丸からは内堀に架かる小橋を渡らなければ本丸へは入って行けない。

橋は角筒形をした鞆橋(さやばし)で、橋の中を渡っているときには外景が見えず、真っ暗になる。渡り終えると、本丸の空が頭上に広がる。

イエス・キリストが復活した伝説の洞窟をイメージした趣向である。偶然にも高松市美術館に入る玄関では、同じ趣向が凝らされてデザインされている。

テニスコートを縦に2面並べたほどの広さの本丸は、東端に石垣の天主台がそびえ、数段の石段を昇り、門を開くと石垣の中に入ることができる。

天主台と思えた石垣は、中が空洞になっていて、天主・礼拝堂の地下室の壁面になっている。床には大きな玉石が十字架のように十文字に並べられていて、中央にはハートの形

をした、ヨーロッパ最高峰から届いたご神体の大石『聖石』が据えられ、祭られていた。

ひと抱えもある『聖石』には、生駒親正と黒田官兵衛が天下取りを誓う証しのために、両者の紋印が彫り込まれた『聖紋石』である。

中央の『聖紋石』を覆うように、バチカン市国・サン・ピエトロ大聖堂のような天蓋が、4本の螺旋にねじれた木柱で支えられていた。柱にはキリストの生涯を再現した彫刻がほどこされ、床にはハートの葉をつけたオリーブの花と、とげのない真っ赤な聖バラの花が飾られていた。

石垣の上には南蛮寺風天主が建てられていたが、カトリック教会のように地下から吹き抜けになっていて、回廊の隅にはパイプオルガンがすえられていた。

黒田官兵衛の印・花押は、「丸にクルス紋」である。親正の印・家紋は、御所車紋を横半分に割り、下半分が消された生駒家独自の家紋である。

生駒家の家紋は元来、運輸役を象徴する円形の御所車紋であったが、中国大返しや文禄の朝鮮出兵での華々しい活躍を高く評価した豊臣秀吉が、瀬戸内海や日本海を縦横無尽に渡る、生駒家の軍団をほめて、陸上を走る車紋から、海を走る姿に変更させていた。車輪の下、半分が海の中に浸かって見えなくなった、外輪船のような「水切車紋」である。

扇をいっぱい開いたような、半円の家紋を親正は気に入っていた。讃岐の国の地形が、生駒紋とよく似ていたからである。扇形の中央てっぺんの場所が、高松城の位置になり、その上が瀬戸内海である。

聖母マリアを祭る南蛮天主はオルガンチーノの助言で、フランス・シャルトル大聖堂の配置を採用して、入り口は真西向きにした。

シャルトルの町は農業でうるおう都市であり、シャルトルにあやかりたい想いを込めた。讃岐の国は年間雨量が少なく、毎年夏の渇水期には飲み水にも困っていた。春日川と郷東川が運んだ真砂土は水と養分の保持力が悪い土壌で、乾けば石のように固まり、ひとたび大雨が降ればどろどろに崩れ耕作にはあまり向いてない。讃岐の国は広い平野がありながら、米の石高が17万石でしかないのは雨量と土質のせいである。

シャルトル大聖堂の祭壇の上に大切に置かれているのは聖母マリアの『聖白衣』である。祭壇に彫られた紋章は「丸にクルス紋」である。『血屋敷井戸』のハート形をした要石に刻まれた、黒田官兵衛の花押「丸にクルス紋」と同じである。

生駒一正が父の親正をうながした。

「近ごろ、秀吉様のキリスト教への恐れ具合は異常になっています。父上がいかに不動明王を拝する仏教信者であったとしても、南蛮造り様式の高松城天主教会を秀吉様に見つかれば、父上はキリスト教信者と疑われてしまい、いつ高山右近殿のように国外追放の処分が下されるかも知れません」一正の忠告はもっともであった。

日本国内を統一して、さらにアジア全土を我が領土にしようとねらっていた秀吉である。南蛮キリスト教団の実力を知る秀吉は、先手をうたなければ日本を含めたアジアが十字軍



によって滅ぼされるときが近いことを知り朝鮮出兵案を本気化した。

## 18. 希望のない、若者の将来

多賀路雄にはとても気になる、平賀源内が残したひとつの言葉があった。うなぎの蒲焼を販売促進するために、現在でも高く評価される有名なキャッチコピー・『土用丑の日』のことである。

多賀はふと漏らした。「源内が『土用丑の日』としたことで、盛夏の食習慣が大きく激変したのだが、この標語にはもっとほかに、なにか大きな意味が込められているような気がしてならないのだが、誰か源内が残した謎を解ける人はいないだろうか」

しおりは長いヨーロッパ生活で、ドイツ語、フランス語、イタリア語を流ちょうに話せた。

「多賀先生。『どよううしのひ』をヨーロッパの言葉の発音にして、聞きやすく並べ替えると『うど、うひ、よのし』となりますが、この並べ替えが参考になりませんか」しばらく考えこんだ多賀の目が光った。

「しおりちゃん、やったね。源内の暗号が解けたよ。『うど』は小西行長の領地が小豆島から移った、肥後・宇土のことだ。『うひ』は宇日のこと。宇の漢字は大きな屋根の家の意味だから、日は日本国。『よのし』は世の死となる。つまり源内は『国家社会、人類世界は破滅する』ぞと、これから起こる世紀末を暗示していたのだ」

『みさご館』の地下と1階を分ける、木製ドアが開いて応接室に入ってきた若い男の姿を見て、正江を除く3人はビックリした。

目を合わせた若い男も、ドアから後ずさりするほど驚いていた。ドアの前に立つ若者は田中陽太郎であった。

「3人がどうして、ここに来ているのだ」

「田中さんこそ、どうしてここに来たのよ」しおりが田中に聞き返した。

滝上正江には、田中と足立ら3人との関係が理解できていなかったが、両者の間で共通するのは、正江自身だということは理解できた。

田中がベストのポケットからピストルを抜くと、足立の胸に狙いを定めた。

「何をするの。田中君、銃をしまいなさい」

「正江さん、この男は殺されるべき罪を犯しているのです。血屋敷井戸を破壊した張本人です」

憎しみの顔で田中は、ピストルのトリガーをしばった。破裂音がして、弾は足立の左肩をかすめた。正江はあわてて田中の腕に飛びつくと、ピストルを取り上げようとしたが、田中の力ではじきとばされた。

フリーターでワーキングプアの田中は、日雇いの仕事で収入があるときは個室ビデオ

店を渡り歩いて寝泊りしていたが、いよいよ仕事が見つからずお金が尽きたときは正江を頼り『みさご館』で夜露をしのぎにきていた。

正江は田中の自立を促すため、食べ物にも困ったときに限り、立ち寄りを許していた。田中のほかにも、将来がある若者男女を何人も面倒みていた。

足立は懸命に、田中に言い訳をした。

「血屋敷井戸は、高松市教育委員会の了承を得て取り壊したのです。井戸の上に建てる立体駐車場の建設費用は行政からもらう補助金をあてにしているので、丸亀町商店街組合には行政の指導の枠に沿って工事をしなければならないのです。血屋敷井戸の撤去にあたり史跡発掘調査をしましたが、調査費3千万円の全額を丸亀町商店街組合が払いました。役所のどこかが井戸の保存を指示してくれさえすれば、事業者のわたしたちは有無を言わず従うしかないので。井戸を破壊した苦情は、商店街再開事業を監督する省庁に向けてもらいたいのです」

見苦しい言い訳を聞いた田中は怒り、コルト25を脅しで足立の足元に向けて撃った。

「歴史ある文化遺産は、次の世代にそのまま引き継ぐのが発見者の責任だ。たとえ鉄道の駅を造る場所にこの井戸が見つかったとしても、線路を変更し駅の位置をずらしてでも遺跡を守るのが世界の常識だ。それをしなかった関係者は、天罰を受けて当然だ」

田中は本気で足立を殺そうと再びピストルの引き金を引いたが、弾はどれも足立の体をそれた。

田中を説得することは無理と判断した正江は、テーブル上のワインボトルを投げつけ、田中がひるんだ隙に足立ら3人を案内して、一緒に『みさご館』から逃げ出した。

## 19. 海底をつなぐ洞窟池

目にワインをあびて、田中は逃げる4人を見失なった。

一人では追えないと、ふたたびメールで仲間を呼びよせることにした。

まもなく、屋島のふもとから、メールを見た思い思いの服装をした若い男女のワーキングプアーらがぞくぞくと、屋島山頂をめざして登ってくる。

夜明けが近づき、東の空が明るみ始めた。五剣山から日の出が始まると、西の高松市内の建物が輝いた。

丸亀町を中心にして、南に延びた街並みは、碁盤の目に引かれた道路で建物は南を向いて整然と並んでいる。建物には高低・大小の差はあるが日の出の光を浴びると、いっせいに東と南の窓が輝いた。

その中であって、片面にしか光があたらない巨大なビルが周辺に威圧をかけていた。四国で一番高い建築物が、30階建てサンポート・シンボルタワーである。

シンボルタワーは冬至の日の出では、建物が太陽の光を浴びることがない設計で建てら

れている。

多賀は、大勢の追っ手がせまる気配を感じて、身を隠す場所は屋島洞窟以外に無いと考えた。屋島洞窟は巨大な迷宮洞窟であるが、地元の神聖な場所として守られているために、一般には知られていなかった。

4人は藪をかきわけて、洞窟の奥に進んだ。あたりは真っ暗闇であったが、携帯電話のライトを照らすことができたので、足元を確かめながら、天井に頭を打つことなく進むことができた。

洞窟の入り口が騒がしくなった。早くも追っ手がせまってきたのだ。洞窟内に足音が騒がしく響き、追っ手の携帯ライトが4人を照らした。

田中の叫びが洞窟にこだました。「見つけた、いたぞ。みんなでやつらを捕まえてくれ」迷路のように枝分かれした洞窟を4人は逃げ回ったが、とうとう洞窟は行き止まりになり、そこには小さな池があった。

突き当たりになった壁にしがみついた明石は、恐怖におののいた。「もうだめだ、逃げ切れない。みんなを巻き添えにして、申し訳ないことをした。わたしだけが捕まればいいので、みなさんの助命を試みよう」

田中がいる方に進もうとする足立の腕を、多賀がつかんだ。

「あきらめるな。みんなでこの池に飛び込むのだ。潜ったら、わたしについてこい」

多賀は、いきなり足立を池の中につきとばすと、ためらう3人を次ぎつぎに突き落とし、最後に多賀も頭から飛び込んだ。追い込まれた多賀の動きは、とても75歳とは思えない身のこなしだった。

洞窟の中に水柱がくだける音が出て、しばらくすると静まりかえった。洞窟には田中を先頭にして、水面に4人が浮き上がってくるのを待つ大勢の若者たちが、携帯のライトをかざしながら水面を見つめていた。

洞窟の池は井戸のように深かった。底に向かって潜る多賀の後を3人が続いた。5分ほど潜ると、多賀は壁面を手探りして何かを探した。軸が十字になった丸い車のハンドル状のものが見つかった。しおりの力を借りながら、ハンドルを左に回転するとひと一人がやっと通れるような横穴が開いた。

息が切れそうになりながら、4人が潜り込んだ。横穴を抜けると、ぽっかりと空間が広がった。顔を出すと、呼吸ができた。

屋島大洞窟の池にはミステリー伝説があり、池は屋島の地中深く潜り、さらに海面から100m下の海底で横にのびて、5km先に浮かぶ男木島にある「ジイの洞窟」にある池と海底でつながり、二つの池の水位はいつも同じであるとの話が、昔から伝えられている。

正江と足立も、屋島の洞窟と男木島の洞窟が海底トンネルでつながっている噂は聞いたことがあるが、伝説は本当だったのだ。

日本には石積み建築遺跡は少ないが、手掘りした洞窟やトンネルには素晴らしい遺跡が多数保存されている。瀬戸内海の海底トンネルも、先人の手で掘られたものである。

横につづくトンネルは人の手で掘られていて、あちらこちらに分岐していて、行く先は男木島だけではないようだ。

多賀がどちらの方向に進もうかと迷っていると、足立が携帯を操作した。足立の携帯にはコンパス機能がついていたのだ。

「足立くんよ。南西はどっちだ。その方向に行けば、高松城の天主閣にたどり着けるはずだ。高松城は海城で、攻撃されたときに備えて、生駒親正は海底に脱出する通路を掘っているはずだ。その入り口はきっと天主に違いない」

ほどなくして、分岐トンネルが見つかり、4人は高松城へと頭上に注意しながら歩き進んだ。

屋島大洞窟の池では田中らが、4人がいつまでも浮かんでこないことに首をかしげていた。

## 20. 黄金のエレキテル

5キロほどは歩いただろうか。水平につづいていたトンネルが、石段で少しずつ上勾配になった。足立の携帯には光度計機能も付いていたので、迷わず高松城に近づくことができた。

まもなく高松城天主の下かと思える場所まで来ると、トンネルは行き止まりになった。50メートルほど引き返すと、真南に向いて枝分かれするトンネルが見つかり、そちらへ進んだ。200メートルほど進むと、このトンネルも行き止まりになった。

「だめだは。ここから先には進めない。困った。どうしましょう」正江が嘆いた。

いま来たトンネルの屋島側から、大勢が走ってくる足音が響いてきた。田中らが海底トンネルを見つけて、足立たちを追跡して来たのだった。

4人は辺りに逃げ場所を探した。しおりが壁のくぼみに、10キロ入りみかん箱大の箱を見つけた。箱からは鉄棒が突き出していて、その先に2本の細いチェーンがたれていた。チェーンはトンネルの行き止まりまで延びて、さらに壁の奥にまで埋め込まれていた。

「これは平賀源内が作ったエレキテルだわ。源内はここに来ていたのだわ」

正江は木箱の横のハンドルを、一回転させると驚いた。

「まるで新品のように滑らかに回転するわ。源内はエレキテルをいくつも製造したけれど、こんなにチェーンが長い機種は初めて見たわ。もう少し回してみましよう」

田中らが目前に近づくのが分かっているけど、源内ファンの正江はエレキテルを動かしてみずにはおれなかった。回転にはずみがつき、チェーンが熱くなった。さらに回転に勢いをつけたとき、火花がチェーンを伝いトンネルの奥に吸い込まれていった。

焦げ臭いにおいがチェーンと壁の小さな隙間から漂ってきた。においに敏感なしおりが不安がった。

「なんだか、やばい感じよ。こちらにある布団のシーツみたいなものは、どうしてここに用意されてるのかしら」

よく見ると、エレキテルが置かれていた奥のくぼみに、幾重にも折られて積み重ねられた白い布が押し込まれていた。

布を見た多賀があわてて叫んだ。「源内の発明した、燃えない布『火浣布』だ。みんな急いで火浣布を頭からかぶるのだ」

4人が布を引き出し、体を包んだ瞬間に、トンネルをふさいでいた壁が崩れ落ち、開いた壁の奥から猛烈勢いで炎が噴出してきた。

火炎は4人を焼き殺すように吹き抜けると、トンネルの先に流れて消えた。もうもうとした煙がおさまり、静かなトンネルに4人の無事な姿が現れた。

「びっくりしたなあ、もう。源内の『火浣布』に救われた」

多賀の安堵の声に、3人も落ち着きを取り戻した。しおりは田中らの若者たちの安否が心配になっていた。「田中君たちが無事だといいいのだけど」

焼け焦げたトンネルの崩れた壁の奥に、大きな空間が広がっているのが見えた。横幅60<sup>メートル</sup>、奥行300<sup>メートル</sup>、高さ30<sup>メートル</sup>もある、かまぼこ型をした巨大な岩窟ドームが出現した。

しおりら4人は用心しながら岩窟ドームに侵入した。

まもなくして、4人に追いついた田中と100人以上の若者たちは、目の前に現れた巨大な空間に驚き、しばらく声を出すことができないでいた。田中は足立を殺そうとして、追ってきたことを忘れてしまっていた。

壁にはくぼみがいたるところにあり、たいまつが置かれていた。若者たちが次々ライターでたいまつに火をつけていった。明々と灯された岩窟ドームは、巨大な体育館のようであった。

多賀、足立、正江の年配3人衆には見覚えのある形であった。今は取り壊されて無い、高松市役所の前にかつて建っていた、かまぼこ型市民体育館と同じ形をしていた。

明るく照らされた岩窟ドームの中に、巨大な船が一行に並んで浮かびあがってきた。生駒親正が隠していた、亀甲船3隻と鉄甲安宅船3隻の計6隻である。

亀甲船の船先には竜頭の飾りがあり、竜の口からは火炎を噴出したあとの煙がなびいていた。

それぞれの軍船の中には、まばゆいばかりに輝く黄金や財宝が、ぎっしり詰められていた。

ここはどこだろう。足立が携帯アプリのコンパスで位置を確認した。

「驚きだ。ここは丸亀町商店街の真下だ。この岩窟ドームの真上が、丸亀町アーケードの通りになっているのだ」

6隻の軍船に忍び込んだ若者たちは、見たこともない大量のお宝にうずもれて狂喜して

いる。どれほど働いても、金塊の1本すら得ることができない格差社会の中に、この若者たちは置かれている。苦勞してようやく仕事を見つけても、解雇におびえながら不安定な賃金で一生懸命に働いているのだ。

大きな掘削音がして、天井から杭が突き出してきた。丸亀町商店街 B・C 街区の再開発による基礎工事が始まったのだ。

丸亀町は高松城の外堀の外になるという扱いで、城内とはみなされず、高松城遺跡発掘調査の対象地区には入っておらず、開発工事現場の地下を調査する義務はなかった。

しかし、丸亀町商店街は生駒一正が高松城内の一角として、町割りしたのである。そもそも丸とは、城内の場所を意味した用語である。

次々に打ち込まれる杭に、とうとう岩窟ドームの天井が崩れた。滝上正江は崩壊寸前に、3つのエレキテルを発見した。

どれも本体は漆塗りで仕上げられ、豪華な装飾がほどこされていたが、静電気を発生させる回転ハンドルの材質が違っていた。銅、銀、そして黄金の3種であった。

正江は1個なら持ち出せると、重なった岩石の隙間に手を伸ばしたが、どれを選べばよいのかで迷った。正江は平賀源内に、三択の暗号で試されているよう気持ちになった。

岩窟ドームが崩れる轟音の中から、だれかの呼び声がした。「正江っっ、急いで逃げろっ。まもなく岩窟ドームは完全にくずれるぞ」

木こりが池に落とした鉄の斧を、女神が水中から金と銀の斧を拾い、木こりに落とした斧を選ばせるという童話がある。木こりは正直に、鉄の斧ですと答えて女神からほめられ巨万の褒美をもらったという教訓話である。

正江は考えた。女神が差し出す斧なら無欲で選ぶのが正解だろうが、いまではインチキ山師とまでいわれる、一発屋の平賀源内が相手である。

「ここは現実に戻って、金のエレキテルをいただくことにするわ」

選んだ金のエレキテルを抱えた正江が岩窟ドームから抜け出すと、同時に天井が激しく崩落し、飾られていた財宝と共に亀甲船と鉄甲安宅船が瓦礫の下に埋もれてしまった。

洞窟に流れ込む海水に流されながらも、崩落した隙間から全員が、脱出することができた。

洞窟から押し出されるように流れて着いた先は、高松城天主の天主台を取り巻く内堀であった。堀の水面には、泥だらけになった人々が次々と浮かび上がると、大きな息継ぎをした。

## 21. 『ナガレバチ』に集う

岩窟ドームから、からくも脱出した多賀先生、しおり、足立、正江、そして田中5人の姿が夜の閉館した高松市美術館のエントランスホールにあった。

2つの照明がエントランス中央に展示された流作品『黒のナガレバチ』の目の位置に映りこみ、聖母マリアが怒り悲しむピエタの姿のように見えた。

しおりは田中のこれからを、心配していた。「高松市と香川県の歴史学芸員と、高松市立美術館館長の3人を殺しておいて、田中君はこれからどうするの。わたしに協力できることがあれば、手助けさせてちょうだい」

田中の表情は意外にも、さっぱりとしていた。「ピストルで3人も殺せば、確実に死刑になるでしょう。でも、僕がやった殺人は無差別殺人ではない。理由があつての天誅をしたつもりだ。次の世代をになう若者たちに残すべき文化財を破壊した3人の犯罪者を、死で罪をつぐなわせたのだ。僕は彼ら3人に罪ほろぼしをさせたという自負がある」

確かに、『血屋敷井戸』は高松の繁栄を招くための『聖杯』である。高松城発掘調査で発見されたものではダントツに貴重な遺跡であろう。平賀源内の暗号で封印され、幾多の危機をくぐり抜けてきた『血屋敷井戸』を後世にのこさず破壊した罪人は、文化国家では罰せられて当然である。

「夜が明けたら、僕は香川県警察署に自首します。そして、裁判員制度で選ばれた一般市民の判断で裁いてもらいます。たとえ判決が死刑になったとしても、乱開発から文化遺産を守ろうとした一人の男がこの街にいたことを裁判記録で永久に残れば、僕が生きた28年間の人生がここで終えても満足です」

足立、正江、多賀の3人は『血屋敷井戸』を次の世代に残す行動をすることなく、遺跡の破壊をみすごしていたことを恥ずかしく思った。

多賀はおおいに反省した。年金生活で悠々自適の余生が送れるということは、若者のすねをかじっているということだ。若者の稼ぎに余裕があればこそできることで、いまの若者にはあまりにも酷な、厚生・年金の社会制度である。

田中らの世代が、将来に希望を持ち安心して働くことができる社会を用意してやるのが、多賀の世代には自覚が必要だと理解した。

滝上正江は反省した。建築物を創造するときには、精霊の声をしっかりと聞き、設計に織り込むことにしよう。

生駒親正が人口ゼロ人の干潟沖洲に高松城天主を築き、聖母マリアを祭り繁栄を求めた讃岐・香川県の上空には、もろもろ神仏の靈魂が渦巻きながら龍神の姿で監視をしているのだ。

丹下健三は広島平和公園や東京都庁舎の設計に携わりながら、弘法大師と崇徳上皇に守られた香川県の都市計画(縄張り)に際しては、邪気の風を阻まないように、足をはかせた香川県庁舎を建て、そして富をもたらす亀甲船型県立体育館を竣工させて、讃岐・香川の末永い繁栄を祈った。

宇高国道連絡線が瀬戸大橋の完成で、高松が四国の玄関としての機能を失うことを補填

するために、四国の玄関にふさわしい巨大建物が設計公募された。最終審査で3社に残った丹下健三の設計は工事費が高いとの理由で採用されなかった。

高松のシンボル建築として選ばれたのは副知事の意向で、四国一の高さをひたすら求めた29階のビルディングタワーであった。さらにもう1階継ぎ足せば、中四国で一番高いビルになれるとの噂に誘われて、臨時県議会で1億円の追加補正予算を承認させた。そこまで高さにこだわり着工したが、工事中に広島市で30階よりも高いビルが建築中であることを知ったのはご愛嬌であった。

四国で一番高い30階ビルが「サンポートシンボルタワー」と命名されて竣工したのは昭和16年4月であった。

ビルの最上部には、フランス・パリのルーブル美術館に向けて建つ、三つの凱旋門のうちで、ビジネスタウン区に建つ「第三の凱旋門」にも似た門が、北東と西南に向けて構えである。夜は門に照明が灯る。門が迎える方角は、北東・表鬼門と西南・裏鬼門である。

例年は渇水で少々悩む程度の、自然災害が極めて少ない香川県であるが、昭和16年「シンボルタワー」が竣工した昭和16年には、台風16号を始めとして巨大な台風がたびたび来襲して、香川県内に大被害をもたらしたのである。

オランダ・アムステルダムのように堤防で囲まれた高松のデルタ平野を高潮が襲い、海水に浸かったアーケード商店街の通りを、瀬戸内海から迷い込んだチヌやワタリガニの魚貝類が泳ぎはねまわっていた。

正江が多賀に確認をした。「そういえば、多賀先生の心臓の調子が悪くなりはじめたのは、いつごろからかしら」

「台風16号の床上浸水で、一階の畳を二階に上げてたときから、体調が悪くなったんだ。そうか。これはきっと風水を破った、シンボルタワーの完成が影響したのかも知れないな」  
「建築設計を依頼される時、施主はデザイナーに風水のよい建物を求められるわ。縁起にあまりこだわらない依頼主でも、鬼門の部分にだけは、デザイナーとして充分注意をして、災いのない設計をしてあげるのが常識となっているの。少なくとも、私はそうしているわ」

正江が設計士として駆け出しのころ、個人的に親しい新婚夫婦の新居を設計することがあった。風水にとらわれず実用性を第一にした機能的な間取りの住宅を建設した、使い勝手のよい家は高く評価された。正江は優れた一級建築士として高く評価された。

しかし、しばらくするとその新婚夫婦には不幸がつづき、2年後のドライブ中に大型トラックと正面衝突をして夫婦と子供は即死した。事故は「香川交通死で全国最悪」と新聞で大きくとりあげられた。

世間の目は正江の設計した家の間取りに集中した。トイレの位置が鬼門の北東にあったからだ。

「多賀先生なら、かりに、鬼門に向いたシンボルタワーが香川に災いを引き寄せていると



したら、対策をどうしたらよいと考えますか」

「シンボルタワーは下部のホール棟と上部のタワー棟で構成されている。鬼門を向いているのはタワー棟だから、ホール棟を残して、タワー棟だけを除けばいいと思うのだが、どうだろうか」

「それは『減築』の考え方ね。日本の人口減少に対応して、建て過ぎたり古くなって使いづらくなったマンションを実態に合わせて改築することよね。多賀先生は呪われたシンボルタワーを運気をもたらす建物に改修するために、タワー棟を撤去せよと言うのね」

「できるものならそうして欲しい。別格名園『栗林公園』の周りに景観を害する高層マンションを建てさせないようにと、住民運動が活発になっている。高松城の史跡公園を見下すように建つ四国一高いシンボルタワーこそ、歴史的景観を行政自らが台無しにしていることに反省をするときが来たのだ。近頃連続して起こる不吉な事故事件を見ていると、シンボルタワーの破壊こそが高松の運気を助ける方法だと思えるようになったのだよ」

足立は足立なりに反省した。『血屋敷井戸』を同じ場所に修復して、先代が高松の街の加護を願ったシンボルの『聖杯』を、ふたたびよみがえらすことで壊した罪を許してもらいたいと思った。そして、高松城の遺跡を残すことの大切さのを、後世に伝えていく活動をしようと誓った。

しおりは、我が子の名を忘れた痴呆症が進行している母親の介護をしながら、ふるさとの高松で子供たちにバレエの楽しさを教えようと決めた。もうパリのオペラ座には戻らないと決めた。

田中が罪をつぐない許されたときには、田中と一緒に子供たちに文化を守る大切さを教えようと思った。田中はしおりと人生をやり直したいと思い、目が涙でうるんだ。

正江は持ち出した黄金のエレキテルを、高松市美術館に寄贈することにした。恥ずかしいことに高松市美術館には、源内の作品は一品も所蔵されていない。西洋美人図は神戸市立美術館の所蔵である。

正江は『黒のナガレバチ』の台座とバチのつなぎ目に、金属のリングが巻かれていることに気づいた。直感を信じてエレキテルを近づけると、黄金のハンドルをはげしく回転させてみた。正江には静電気の発生で、何かが起こるのではないかとの確信があった。

エレキテル箱の天板から突き出た2本の電極からは、青い火花がスパークすると、金属リングに吸い込まれるように、激しく火花が飛んだ。

破裂音とともにナガレバチの上部が弾けて砕けた。ナガレバチは十字架の姿になっていた。

高松市立美術館に行く歩道は、玄関前で三段の階段になり、橋の親柱のように、ガラスでできた三角錐のモニュメントが石台の上に置かれている。

明かりが灯されたガラスの三角錐は玄関の方向を示すように玄関側に長く伸び、横一列

に四つ並べられている。

東から3番目の三角錐が、玄関に向かって正四角推ピラミッドに見える位置に立ち、導かれるように玄関に進むと自動ドアがひらき、まるで洞窟の中に行くように、低い天井の通路を行くと、奥からもうひとつのピラミッドが見えてくる。

エントランスホール奥の天井には、13番目の谷折で完成する下を向いたガラスのピラミッドが、玄関前のピラミッドと向かい合っているのだ。

上を向いた、石台に置かれたピラミッドは常夜灯として光り、下を向いた逆さの、天井のピラミッドは、月明かりをエントランスホールに注いでいた。

2つのガラスのピラミッドを結ぶ交点には、『ナガレバチ』から平賀源内が残したエレキテルで誕生した、大きな十字架が立っていた。

エントランスホールの足立、しおり、滝上の3人は、天井からの淡い月明かりで浮かび上がった、4柱もある黒御影石の十字架の美しさに身震いを感じた。

十字架を囲む3人は、見えない何物かを心で見ていることに気づいた。3人が見たものは、一輪の赤いバラの花で飾られたマグラダのマリアの石棺であった。

『ダヴィンチ・コード』ではパリのルーブル美術館の地下深くにマグラダのマリアの棺が隠されていることになっているが、『源内・コード』では高松市美術館のナガレバチの下に棺があることになっている。

黒田官兵衛が朝鮮出兵で奪ってきた財宝の中に、シルクロードをへて朝鮮にたどり着いたテンブル騎士団が守る秘宝の棺があった。官兵衛はこの棺を奪い高松城に持ち帰っていた。

3人は高松市立美術館『黒のナガレバチ』台座の地下深くに、官兵衛が隠した『マグラダのマリアの棺』を心の目を見て、棺の存在を確信するのであった。

それはあたかも映画『ダヴィンチ・コード』のラストでラングドン教授が、ルーブル美術館ガラスのピラミッドの地下深くにマグラダのマリアの棺を幻想で見たときと同じように。

完（200頁版）

この作品はフィクションです。実在の人物名・団体名・役所名等とは関係ありません。